

カタリスト論序説

伊藤 憲 宏*

The Fundamental Reflection on the Catalyst that would induce better change for the global arena

Norihiro Ito

Summary:

There have been many persons or elements those have been trying to make the realities better. This thesis is the history and the reality of those who have tried to cope with millions of difficulties tasting own life so that world would become better than yesterday. In short, this is the story of those who have been to "Being". Careful research, examination and analysis have done for over half century to prove "the catalyst". "The Changes" could be interpreted many ways. To halt the worst situation is a big burden for anyone. Yet the world have wanted such those who dare not sacrifice his or her own life. Those persons could be called in Japanese traditional context "The Seven Samurai." The definition of the catalyst has not yet defined globally. It is my pleasure to discuss who or what would induce better change for the world to come. It is the younger generation's tasks to inherit 20century lessons by all means. I sincerely welcome you on the public platform to start dialogue on those who or what have made the realities better. We have to cope with any kinds of catastrophe that may occur before hand. Prevention of any kind of global risks are the main missions of the catalysts, I surely welcome you to stand up on the Platform of Better Change as a person. That is as "The Being." The ultimate goal or the mission of the catalyst is to eradicate all sorts of social degrees by all means so that society and the people could revitalize their own community. How could it be possible? The answers are strong bondages among the trustful true friends in the global neighbors, Let me ask you do you really have friends who are concerned of global issues?

第1節 カタリストとは何か

1 カタリストとは

近年さまざまな国際会議や国際交流の活動などの場で、社会変革の担い手や異文化間の相互理解と交流促進の担い手、または文化の再生や活性化の担い手、さらには、人々の人間性の復興の担い手として、カタリスト (Catalyst) という言葉がよく使われているのを知見する。またこの言葉は、ムラ意識が濃厚な閉塞的なムラ社会やそこに生きるムラびとの閉塞的な心的状況を解き放ち、豊かで開放的な活気ある社会や人間を育成していく担い手としても使われているのである。

* 国際交流共同研究所所長

カタリストという言葉は、もともとは化学用語で「触媒」という意味である。触媒とは「熱力学的には進行可能であるけれども、遅いある特定の化学変化の反応速度を、少量の添加によって、著しく増大させることのできる物質」である。

こうした化学上の文脈から、このカタリストという言葉は、Merriam-Webster辞典によれば、1970年代初頭から「彼女はこの欠乏を克服するためにカタリストとして活動している (She acts as a catalyst to overcome this lack)」という用例に見られるように、擬人化された形で使用され始められてきているのである。また、70年代半ばには「西欧諸国では貿易がソ連国内の自由化へのカタリストとなると考えている人もいる (Some Westerners even envisage trade as a catalyst for liberalization in the USSR)」というような用例にも使われ、変化を促す要因としての意味で使われていることを載せている。こうした形で70年代にはさまざま表現でこのカタリストという言葉の使用が開始されているのである。70年代に入るとカタリストとは「変化の早さを促す人」という意味に幅広く解釈され、たとえば「他の連中の興奮を引き出すためにだれかカタリストになれるものを連れてこなくては (You've got to have somebody who's going to be a catalyst, to bring out the excitement in the other guys)」というような形で大衆化し、この言葉が日常生活に定着してきたことを紹介している。

90年代に入るとこのカタリストという言葉は、国際社会の中で幅広く使用され定着するようになり、カタリストとはおおむね次のような意味として理解され、使われてきている。すなわち、カタリストとは「新しい崇高な理念や思想・価値観・計画 (well nobled ideas, intentions, values and plans) に基づき活動を行い、人々や社会に刺激を与え、変革を行う人」である。この言葉はいまや国際社会の共通用語となっているのである。特に国際社会のNGO関係者の間では「よく使われている (is best used)」ということである。

日本においてはこうした文脈でのカタリストという言葉の使用例は一部にないわけではないが、まだほとんど使われていない。使用例もきわめて少ない。またカタリストの意味概念もまだ明確に議論されたことはない。ちなみに国際社会では先述した意味でのカタリストの使用は多いが、その意味概念については知見する限り日本と同じように、明確に論考をしたものはないようである。本稿の目的はこれを原理的に行うことにある。

2 現代のカタリスト

さて、これまで表現された文脈で、カタリストというものをまず考えた場合、私たちは事実こうした理念や思想や価値観さらにはこれらに基づいた計画をもって、さまざまな活動をしている人々を世界や日本に数多く見ることができる。

たとえば、国境を超えた人類的規模での課題、すなわち平和の実現や貧困の解消、民主化の実現や人権の確立、医療・食糧や教育の協力や大災害による緊急援助などを行っている人々、世界の伝統文化や遺産の保護と再生を行っている人々、国際社会に必要な人材を育成している人、さらには地球環境の保護などを行っている人などがいる。

また、国内社会での課題すなわち、民主的で公正な社会の確立や社会的に弱い立場に追いやられている人の自立のための活動を行っている人、多文化社会の確立や国際教育の実践を行っている人、国内の伝統文化や伝統生活の保護と継承と再生を行っている人、そして、新たな文化の創造を行っている人、地域社会の活性化を行っている人、さらには次世代を担う人材の育成を行っている人

などがある。

こうした人たちは確かに高い理念や思想や価値、さらにはこれらに基づく計画を実現するために日々営みをしている使命感達成型のカタリスト（mission oriented catalyst）、または問題解決型のカタリスト（issues oriented catalyst）であるということができる。

現在国際社会で語られるカタリストというのはおおよそこうした型のカタリストのことをいう。しかし、変革や変化の触媒役は必ずしもこうした人たちだけではない。人の社会や文化、さらにはそれぞれの人の内面に触媒作用（catalytic action）を生起させる人は、このほかにも多様な姿で見ることができる。

本稿では、変化や変容・変革をもたらす人々としてどのようなカタリストが存在するのかをまず概観し、その目に見える表層現象を考察の入り口として、その触媒作用の意味を深層にまでさかのぼり、その原理性を探求することとしてみたい。そして、これらを考察する過程で、触媒作用をおこしうる人々の構造とはいったいどのようなものであるのかを、総合的な視野から解明していくこととしたい。

さらには、そのことが私たちひとりひとりにとって、また現代・未来の私たちの社会や文化にとって、どのような意味があるのかを合わせて、ともに考察してみることにしたい。

ところで、触媒作用を起こす要因は人だけではない。人々の精神や感情さらには知性に感動を与える著作物、または絵画・工芸作品・映像・写真も、その作品自体に触媒作用があることから触媒作用の要因すなわちカタリストであるということができる。また、歌舞や謡い、演劇の所作さらには宗教を源としたさまざまな祭禮儀礼の所作やその宗教空間も、人々にカタルシス（精神的浄化）を与えることから、その空間の中で儀礼を演じる人々をカタリストということができる。カタリスの始源的な姿と触媒作用の基本的な構造は、実はそもそもこのあたりにあるのではないのかとも思っている。

3 原理的意味でのカタリスト

かつて拙稿「国際交流のグランド・デザイン—〈自己・共同体〉と〈異人・異界〉のダイアログ」（『GLOBAL AGE』1994年5、6月号）で、このCatalystという言葉を決定的に考へ、記したことがある。「日常空間と非日常空間を巡遊し、両者間の触媒役（Catalyst）となっていったこうした、〈ほがいびと〉は、この日本にはもういない。しかし、細い水脈ではあるが、日本人の意識の奥深くにその精神がまた幽かながら息づいているような気がする」と。「ほがいびと」とは万葉の時代に一所不住の姿で人々に祝言・言壽ぎをしながら生活を営んできた壽人のことである。

この小論はこれまでのさまざまな国際交流状況を俯瞰しつつ、その今後の方向性を考えるための視座と透視図を描くための歩みかたをまとめたものである。それを担っていく、いわゆる国際交流の担い手とは、基本的には確かにその言葉が示す通り、日本においては日本人と外国人との間のさまざまな営みの担い手を意味するが、その営みを担うということの意味をより深く掘り下げて考えてみると、外国人またはその人々の世界と日本人およびその人々の世界との関係をどのように担っていくのかという問題は、確かに国際交流という文脈ではエスニシティの差異にまつわる事象が第一義的なことではあるが、その担っていくものに象徴される深層的なまたは原理的な意味というのは、決して外国人とか外国人の世界ということの関係だけではなく、そこに象徴されている異質

なる人（異人）または異質なる世界（異界）と自己またはそれをとりまく共同体との関係をさまざまな形で担うということになるのではないのか、すなわち異人・異界との関係の触媒役となる、ということなのではないのかと思ったのである。

そのように考えていくと、さまざまな国際交流活動を行っていくことの意味を原理的に考えていくと、異人・異界というのは必ずしも外国人や異民族やその世界のみ視野を限定する必要はなくなるのである。付言すれば、これらの活動を通して、それぞれの自己にとって、または人間にとって、非日常的な人である異人や非日常的世界である異界というものを考えることによって国際交流がいったい何を原理的に探究しているのかがわかってくる、ともいえるのである。

この日常性や非日常性そして、それにとまなう異人・異界の概念は周知の通り民俗学や文化人類学で早くから導入され、さらには近年では歴史学でもこの視点が入り入れられ研究が行われている。そして、これらの分野で異人・異界の認識のためのパラダイム（知的枠組み）がさまざまな実証例や諸文献からの研究をふまえて構築され、同時に幾度も検証し直されている。国際交流活動の諸分野にもこうした視点も合わせて導入しこの諸相を考察していくことによって、国際交流の総合的なパラダイムも構築できると思えるのである。

国際交流の中にこのような異人・異界の概念を導入することについては一見論理的飛躍があるようにも見えるが、国際社会ならびに日本社会の国際的な人間関係、社会・文化関係の流れを俯瞰すると、ともに学び働き生きる外国人は、その関係が日常的に緊密であればあるほど私たちと同じ人間としての共感が生まれてくることから、必ずしも異人とはならず、また一方、同じ日本人でも、私たちと異なった価値観を持っている者や逸脱した行動をとる者、また同じ人間としての共感を得られない者は、その非日常的関係から日本人であっても異人である、ということができる。

4 人間認識の限定性と人間存在の幻想性

さて、異人認識の基本的な考え方であるが、一般論として人間の他者認識は常に限定的である。私たちの知りうる人も、生涯をかけても限られている。また知りえていると思っている知己すら、果たしてどれだけ本当にその人のことを理解しているかは、だれしもが疑問のあるところである。ましてや、直接面識のない人々については、さまざまな映像や入手した情報・資料から自分で想像するしかない。逆から見れば、こうした見知らぬ他者の私たちに対する認識も限定的でしかあり得ない、ということに当然なる。

ということは、私たちの人間認識というものは常に限定的であり、こうした限定性に基づき認識された人間の存在というものは、原理的に幻想的な存在でしかない、ということになるのである。この宿命から人間は逃れることができないのである。つまり自明のことながら、人間はだれしもが異人性をおびた存在であるということなのである。

無論、同じ国民・民族同士であれば、歴史や文化・風習をある程度共有しているため、その範囲において、非日常的な関係の他の国民・民族よりまだ認識しやすいという側面は確かにある。しかし、それとて共同幻想のうえに成り立っている認識である。

また、歴史上の人々については、日本であれ世界であれ、その人々を裏づける資料から限定的に読み取るしかない。このような意味から、異なった他者すなわち異人に対する人間の認識というものは、所詮ある限定性・幻想性の中でしか行うことができない、という冷厳な事実がある。そうし

た意味ではある具体的人間が正しく認識されうるということは現実的に不可能なことなのである。あるのは幻想的な認識感情である。

では人間は他の人間を認識しうることはできないのか。基本的には限定・限界があるという基本認識のうえで、唯一の認識方法は、らい病患者として夭折した北条民雄が『いのちの初夜』（1934年）で指摘しているように、人間を認識するということが個々の人間がそれぞれの「人間の響き」をどのように感得するかにかかっているのである。人間の他の人間の認識とは、結局この両者の響きの共振性でしかないように思える。そして、みずからその響きを発することができなければ、残酷ではあるが他者はその人を認識・理解することができないのである。

この人間認識の限定性と人間存在の幻想性が、異人・異界を考えるうえでの要点となるのである。この認識の媒介役として、異人や異界を巡遊してきたカタリストが存在すると思うのである。

5 カタリストとほがいびと

さて、先述の拙稿ではこうした「非日常的な人と世界」と「日常的な人と世界」の両者の触媒役（Catalyst）として、かつての日本社会にはこの両界を巡遊した「ほがいびと」がいたことを述べた。この「ほがいびと」については後に詳述するが、これは先述した通り万葉の時代から漂泊・放浪をしながら、人々に言壽をして生き続けてきた乞食者または祝言人とよばれた下級の神人（じんにん・じにん）か巫または辻芸能者たちのことである。この「ほがいびと」の原像については後に紹介するように諸説があり、この人々がどのような人々であったのかは、まだ断定し得ない。しかし、いえることは、日本の原始的な宗教の始源的な担い手、また芸能の始源的な担い手が、この「ほがいびと」であったことは折口をはじめとした数々の論考によって明らかにされているのである。

今日いわれているカタリストと日本の古代のこの「ほがいびと」は、確かに表面的にはその諸相を異にするものである。しかし、このカタリストの属性とこの「ほがいびと」の属性をその基層の部分で抽出していくと、多くの側面で重なり合うことがあるのである。では、どのような側面がどのような形で重なり合うのだろうか。このことについては、今日いわれているカタリストの姿をまず概観し、さらに「ほがいびと」の原像がどのようなものであったのかを歴史的に考察していく過程の中で、後に可能な限り明らかにしていくこととしたい。

6 日本におけるカタリストの概念の変遷

さて、この「触媒」の文化的機能の概念であるが、この概念はすでに戦前に日本にあったことがある一冊の随筆集からうかがい知ることができる。それは昭和9年に発行された吉村冬彦の『触媒』という一冊の図書によってである。吉村はその「自序」の中で書名を『触媒』とした理由を次のように述べている。「例へば、水素と酸素の混合物は常温常圧では殆どまったく化合しないといつてよい。然るに白金かパラジウムかの極めて微細な粉末状になったものをこの混合瓦斯中に入れると、それが媒介となつていわゆる接触作用catalytic actionによつて酸素と水素が化合して水を生ずる。併しこの金属細粉自身は単に媒介者となるだけで化合の結果には入り込んで来ない。それで唯若干量の金属さへあればそれだけで無制限に酸素水素の化合を進行させることが出来る。この場合にはこの『白金黒』又は『パラジウム黒』がいわゆる『触媒』となるのである。これは単に一例であるが、この外にも色々の化学作用が色々の触媒によって誘導される、それを利用した色々の化

学工業が次第に発展して来るようである。(中略) 自分の書いている随筆は大抵瑣末な日常の雑事の記録か感想であつて、それ自身にはいはばガラスの破片のようなものであらう。併し、もし此等の随筆の読者の頭の中に二つ又は三つの互いに化合すべきもの、あるいは一つの分解すべきものがあつて、それがたまたま手近に媒介物のないために化合せず、或いは分解せずにいるといふやうな場合に、このガラス屑がいくらかでも触媒の用に立つてその化合なり分解なりを誘発する機縁になるかも知れないと思はれるのである。そうでなかつたとしたら、この随筆集の著者は此書の存在理由を他に求める為一方なるぬ困難を感じなければならないであらうと思はれる。

吉村はカタリストという言葉は使っていないが、この自序からわかるように、吉村は触媒の化学的文脈をふまえて、その文脈を文化的な機能の文脈に敷衍していつているのである。付言すれば、田久保英夫の小説に『触媒』(78年)というのがある。

今日国際社会で使われている社会変革の担い手または異文化間の担い手という現代的な文脈で、このカタリストという言葉とその意義を日本で唱導し始めたのは、おそらく山本正(日本国際交流センター理事長:当時)が最初ではないのかと思う。山本はいまから20年前の1976年に『月刊国際コミュニケーション』(7月号)に「キャリアーとしての国際交流」という随筆を寄稿し、その中で、国際交流のプログラムオフィサーの役割は「カタリストであらねばならない」と、次のように述べている。「現在、国際交流のスタッフ・ワークを必要とすることのひとつとして、海外から日本について勉強に来る人たちの手助けをすることがある。わが国が経済大国として世界の注目を浴びるようになったこの数年来、海外の学者、政治家、ジャーナリスト、経済関係者等々、実に多くの人々が日本について理解を深めることを期待して来日する。(中略)このような協力を行うには、まず何よりもスタッフが相手の人間とコミュニケーションをもち、相手の気持ちをよく理解することが大前提になる。これは個人の訪問者に限らず、より大きな会議とか、共同研究プロジェクトに参加するために、グループで来日する人たちに対してもそうである。これらの人たちにとり、スタッフは日本との接触を容易ならしめるファシリテーターであり、日本人とコミュニケーションをもつことを助けるカタリストであらねばならない」。

また1981年にはトヨタの英文海外広報誌『the wheel extended』の中で「日本の国際化のためのCatalyst」という表現を使っている。この山本の考え方はその後一貫として続き、92年には『あすかフォーラム』誌のインタビューで「……社会変革の触媒として(民間の)組織が必要なのです。いままでは官僚からの変革に頼っていたが、現代の変革それではできない」と述べている。

カタリストという言葉の適切な日本語訳はまだない。「触媒」とするにはあまりにも直截的すぎる。またカタリストの実態もまたその概念もまだ流動的である。カタリストとはいったい何かについて十分議論が行われ、時間が経ってこの言葉の意味と本質が定着し、その概念が発酵して、それにふさわしい日本語が考えられるまで、しばらくは、このカタリストという言葉のまま使うこととする。

第2節 カタリスト論の視座

本稿においては、カタリストという表現で語られる人々が、いまなぜ現代の国際社会また国内社会で必要となってきたのか、その存在意義は何なのか、またカタリストとはどのような人々のこと

をいうのか、そしてカタリストの始源的な姿とはいったいどのようなものであったのか、また、彼らの全体構造（コスモロジー）とはいったいどのようなものであるのか、そしてさらには、カタリストという言葉とその意味するものが、私たちひとりひとりに、どのようなことを問いかけてきているのかを視点に入れながら、カタリストのコスモロジーをさまざまな角度から縷々歴史的視点も入れながら、ともに考察してみることにしたい。

1 カタリストの現代における諸相

そもそもカタリストとは、いったいどのような人のことをいうのか。まずそれを概観してみることとしたい。そして、こうしたカタリストと呼ばれているこれらの人々の現在における存在意義をさまざまな角度から検討してみることにしたい。

カタリストとは、原義的にはさまざまな分野において変化をもたらす触媒的属性を持った人のことをいう。したがって、カタリストとはこうした触媒的属性を持った人の総称であると思う。確かに国際社会では、冒頭に述べたように「崇高な理念や思想や価値観そしてそれに基づく計画をもって社会変革を行っている人」のことをいう。そして先述の通り、そういう人々は多くこの日本や世界にいる。カタリストをこのような認識枠だけで把握するのであれば、カタリストのその本来の原義であるところの触媒性という最も重要な側面を見失いかねない。そして、変革を行う人がカタリストであるという、一般的かつ通俗的な認識しかできなくなる。変革の担い手であればだれしもその担い手となることは可能である。しかし、カタリストを考える意義は、繰り返しになるが、その原義の意味であるところのその触媒性というものを考えることにある。ここに焦点をあてて考える必要がある。それはだれしもがその人間の属性として具有しているとは限らない。むしろ、そうした属性は、社会や文化や人の変化を誘発する強いエネルギーであるはずであるため、この種のエネルギーを持っている人は必ずしも多くないと考えるのが普通である。このことを念頭において、カタリストの通俗性と原義性を両方考慮しながら、触媒作用を惹起させることができるカタリストのコスモロジー（世界）というものを探っていくことにしたい。

ところでカタリストを論じた論考は寡聞にして知らない。したがって、本稿は私的試論である。批判を仰ぎたい。そして、現代社会、今後の社会にとって必要とされているカタリストの姿というものをともに考えていきたい。

2 カタリストの形態

カタリストの触媒性に焦点をあててそのさまざまな側面を考えると、カタリストを次のように大枠として考えてみるることができるのではないかと思う。すなわち、①社会変革型カタリスト（social issues based catalyst）、②文化創造型カタリスト（cultural issues based catalyst）、③歴史継承型カタリスト（historical issues based catalyst）、④多文化社会編成型カタリスト（inter-ethnic issues based catalyst）、⑤異文化交流型カタリスト（intercultural issues based catalyst）、⑥境界性媒介型カタリスト（marginal issues based catalyst）、⑦宗教的祭祀型カタリスト（religious catalyst）、⑧精神的高揚賦与型カタリスト（spiritual catalyst）、⑨知的誘発型カタリスト（educational catalyst）、⑩情報発信型カタリスト（informative catalyst）、⑪共同体変革型カタリスト（communal issues based catalyst）。これらについて以下にて考察を加えてみることにしたい。

A 社会変革型カタリスト

カタリストという言葉が一般的に国際社会で共通の理解として使用・定着してきているのが、この社会変革型カタリストである。社会変革型カタリストとは、人間が生きていくうえでその尊厳にかかわる国際社会や国内社会が抱え持つ、さまざまな課題や問題、矛盾、さらには労苦などに取り組み、国境を超えて、あらゆる人間の尊厳を守りそれを伸ばしていくために、その基本的考え方と方途を考え、人々に活力と勇気を与えながら、問題の是正・解決を目指すために必要な働きかけを行い、これらをもって社会の変革を忍耐強く行っている人々のことをいうのではないのかと思う。

こうした人々は次のような問題・課題に取り組んでいる。すなわち、戦争・紛争の予防や停止、これにともなう難民の救援、平和の確立、軍縮の促進、民主的社会の確立、貧困の撲滅、債務労働・人身売買の禁止、社会的弱者の自立とそのための人材育成、民族の従属的関係の撤廃、あらゆる差別の撤廃とすべての人々の人権の擁護とその監視と保証、貧困層への医療・食糧・教育・生活に関する援助・協力、自立のための社会発展協力、先住民族・少数民族・定住外国人・移住労働者とその家族などのマイノリティーにとっても暮らしやすい多文化社会の確立、歴史の負の遺産（植民地主義や戦争さらにはさまざまな抑圧にともなう今日まで続く人々の労苦・苦悩）の人的救済とその清算、大規模の災害援助、あらゆる人道的援助、地球環境の保全などである。

これらの問題はその当該国の問題（national issues）であると同時に、総合社会の中での地域的な問題（regional issues）でもあり、あわせて国際的な問題（global issues）となっている。このことから、これらの問題は国内社会の人道上的問題であるばかりでなく、これがその国の不安定要因ともなっている。そして、それらが波及して地域社会・国際社会の人道上的問題ともなっており、また、その社会の不安定要因ともなっている。こうしたことから、こうした問題は国際的関心事項（issues of international concerns）として国境・民族、それぞれの利害・立場を超えて取り組む問題となっている。その解決のための担い手も当事者である人々は無論のこと、関心や関係を持つ住民・市民、学生、国内NGO・国際NGO、教育関係者・学識経験者・マスコミ、企業・労働組合、地方行政・中央政府、外国政府・国際機関・国連と、幅広いものになっている。言及するまでもなく、こうした問題は、もはや一個人や一組織、また一政府だけではどうにも解決がつかないものとなっているのである。

このことから、多様な人々、多様な組織に働きかけを行い共通の使命を達成するために、それぞれに対して触媒反応を起こさせることのできるカタリストが必要となってきたのである。さらには、こうした多様な人々や関係諸機関の知恵・技術・財源・人材・組織力・使命感・自尊心などに働きかけ、個々には限定された力しかないものを、総体として大きな集合力に転換させ、必要な効果を生起させる触媒役となるのがカタリストなのである。こうした効果をシナジー効果（synergy effect）という。アメリカに第三世界の貧困問題をあつかっている団体としてこの概念を導入してThe Synergos Instituteというのがある。

(1) 人間の尊厳を損なうものとは

社会変革型カタリストとは人間の尊厳を守り伸ばしていく触媒役であることを述べた。人間にはだれしも等しく侵されることのない人間としての尊厳を有しており、その尊厳を守り通して生きていく権利を有している。しかし現実の人間世界はそれを踏みにじるおぞましが絶えない。

では、どのようなおぞまじさが今日なおこの社会には引き続きあるのだろうか。

虐殺・処刑・致死といった、いかなる大義名分をもってしても、その正当性と妥当性を人道上許容しえないおぞまじさがある。拷問・虐待・拘禁・迫害・弾圧・隔離・排除といった強者の虚構の大義による人間性否定のおぞまじさがある。不法な対応措置・不公正な対応措置・不平等な対応措置・差別的な対応措置・侮辱的な対応措置といった、人間の痛みは無自覚な奢ったものによるおぞまじさがある。隷属的・従属的關係の強制といった、自己の都合をつらぬくための隠微な力によるおぞまじさがある。伝統的陋習や無知、虚妄による蔑視・不浄視・賤視・劣等視、無能視・無視といった、これらに呪縛されたおぞまじさがある。

こうしたおぞまじさがそのときそのときの政治や経済さらには文化・社会風潮とからみあって、為政者と権力・支配構造の中にあるものと、さらには市民・民衆とがそれぞれ輻湊した形で内通しあい、こうした状況を現出させているのである。これらのおぞまじさを生む要因は、特定できる場合もあるが、同時に必ずしも特定しえない場合もある。状況によってはみなひとりひとりにあるといってもよい。

これらの人間の尊厳を損なうおぞまじさを解読し、人々を覚醒させ、状況を改善・変革し、おぞまじさを除去する方向へと人々をうながしていくのが社会変革型のカタリストである。これらは人ごとではなく放置しておけば自らにも降りかかってくる問題である。

これらを解決する基本的考え方のひとつとして、国際社会が戦後取り組んできた二十三の国際人権基準がある。これらをどのように具体的に実施していくかはそれぞれの政府・行政・企業・市民にかかっている。と同時に、それを国際社会がどのようにこれらのおぞまじさを予防・監視して人間の普遍的尊厳を擁護・保証・伸長していくにかかっている。

(2) 社会変革型カタリストの要件とは

シナジー効果を発揮させる触媒力を持つためには、カタリストはいくつかの要件を具有していることが必要だと思われる。

ひとつには、問題の是正・解決のための考え方や方策が、多くの人々の琴線に触れ共感をもって受け入れられるということである。これがなければ人々は動かない。大義名分が何であるのかそれを明確にしておく必要がある。

そこには虚構性がないということが要点である。社会変動を起こすためにこれまでかずかずの虚構の大義が唱えられ、人々が犠牲となっていった歴史がある。大義名分としてだれもがうなずかざるを得ないものが掲げられるのである。大義名分のそれぞれの背景を透視する認識力が必要である。

ふたつには、問題の本質を深い洞察力をもって見抜き解析し、人々がこれまで可視し得なかった本質的なものを人々に提示するということである。これにより、人々の問題への覚醒が高まり、関心から行動へとつながる。

三つには、人々の痛みというものをその人々の身代わりとして語れる呪詛性を持っていることと、その痛みを癒すための祝祭性を合わせて人々に語れる、ということである。人々は、語りかけられた言語のこれらの両方の呪性によって精神的なカタルシスを得て、他人の問題が自己の問題と昇華され、痛みと癒しの共有化を図ることができるのである。

四つには、語りかけ行動している人自身が、人間の尊厳とはいったい何なのかを問う、深い人生

観と人間観さらには歴史観に裏打ちされた哲学を持っているということである。この深さが相手を深遠なる人間の営みの諸相へと誘うのである。これらに裏打ちされない安逸で情報過多の皮相なヒューマニズムは、真の感動を人々には決して与えないばかりか、変革を促進する要因とはなり得ない。

五つには、自らのアイデンティティーを育ててくれた民族的または所属集団の属性を大事にしつつも、それに呪縛されない自由な無縁・無主のひとりの人間としての個の発想で語ることができるということである。自己の属性にこだわり、執着しすぎると、共通の人間としての響きを相手は感じる事ができにくくなる。この共振性によって相手がだれだろうが人間としての普遍性を見いだすことができ、ともに考え行動しようと思えるからなのである。

六つには、適切な言語使用と人々をひき付ける自然で説得力のある豊かな表現力を持つということである。いかに問題意識を持って動いていても、それを表現するための適切な言語使用と、豊かな表現力をもっていないと、説得力も半減し、陳腐化してしまう。人々が感動として記憶に残せるのはわずか一言一言、二言である。その感動したわずかな記憶の意味を手繰りながら、人々は動き始めるのである。決して語られた記録などではない、その人に刻みこまれた記憶である。記録は記憶の意味を確認するためにある。

七つには、問題に取り組んでいるときの腹のすわりかたである。前記の社会変革は事情によって、または国によっては自己の死・拘禁などにつながる。事実そうした状況は世界に無数今日でもある。また、こうした営みへの報酬は限られている。生活も満足にできない場合も多い。なんら将来の保証もなく、もの乞う人々の姿が己の身と重なり合うことを幻視することもあるはずである。社会権力・社会構造との対峙もこれから永くある。市民・民衆の理解を得られぬ場合も多いはずである。さまざまな外部・内部からの誹謗・中傷を含めた批判も多いはずである。何らの成果を見ぬまま斃れることになるかもしれないことは、斃れた先人たちから想像もしえるのである。こうしたことがすべてありうるという覚悟とそれらを担いきるという腹のすわりかたを、人々は見ているのである。これがあるということを感じるによって人々は耳を傾け行動するのである。

八つには、人間としての温かさとおおらかさを持っているということである。これがなければ人は安心してついてこない。いくら問題に対する豊富な知識や明晰な解説ができて、その人間に冷たさや優越感、知らないもの、利用価値がないものに対する見下した気持ちが潜在的にあれば、人々はこれらを見抜くことができる。

特に、先述の社会問題は二極分解している。問題解決のための理論・方法がかなり専門的になっている一方で、こうした専門性がないままこれらに関心を有する層も増加しているのである。社会変革を行うためには専門的知識・技術を持つことは必要である。この二局分解も不可避である。しかし、そうであるからこそ、改めて、触媒役となる人は温かさとおおらかさが求められるのである。こうした社会変革には知っている者と知らない者の乖離が生じやすく、知っている者が知らない者にたいして矮小なエリートイズムをもつ土壤がある。"I know. You don't." これまで批判していたこの論理の陥穽がここにもある。

(3) 傾きものとしての社会変革型カタリスト

さて、こうしたカタリストたちは、少なくとも日本においては、その多くの人々が、かつてはこ

の世のムラの秩序と陋習に背を向け、それらを呪詛した異形・異端の傾きものになっていった人々であったように記憶している。この世から離脱せしめられ、自らも離脱していった、いわば浮れびとでもあった。ムラを離脱した後、異郷を巡遊しそこで体得した異質な感情と物語を日本や〈ムラ〉に持ち帰り、この異郷の人々の光と陰の物語りを語り、新たなる非日常的なハレの感情と世界をムラの人々に与え、その光と陰の空間に誘いながらも、同時に日常性に呪縛され閉ざされた日々の中に生きるこれらの人々の安逸さと凡庸さを侵していったかのようにも思える。

社会変革型カタリストには本来的に、こうしたこの世とこの世の人間のおぞましさを身に受け、また自ら担うことを契機として人間の尊厳を考えるカタリストとなっていく場合が多いので、そこにはこの世と人に対する人間の尊厳への祝祭性がある一方で、このおぞましさをもたらしているこの世とそれを成り立たせているこの世の人々への呪詛性が同時にある。

しかし、こうした傾きぶりは、かつての歌舞伎者がそうであったように、その後の時代の流れと社会状況の統合化により、市民的秩序の中に取り込まれ、また、これらの人々も生き延びていくためにその秩序に融合することとなり、その過程の中で彼らの傾きぶりもその異質性を削ぎ落とし、また削ぎ落とされることとによって様式化せざるを得なくなってきているのである。

にもかかわらず、あの傾いた奔放な所作や感情とその精神は、かすかな形でその後のカタリストたちにも継承され絶えることがないようにも思える。

B 文化創造型カタリスト

文化創造型カタリストとは、人間がこれまで創りあげてきた文化と真摯に対話し、それを読解しながら、その象徴するものを現代状況のもとで蘇生させ、これによって人間の無辺なる世界を新たに探求し、その世界を全人格をもって自己の感性・認識・発想のもとに表現し、その発露の姿をもって、人々がこれまで覚醒しえなかった人間の深淵さと豊饒さに触れさせ、もってそれに触れた者の人間観・文化観さらにはその人自身の人間性の復興と再生を時代とともにやっていく人をいうのではないのかと思う。

こうした人々は次のことがらに取り組んでいる。すなわち、人類的伝統文化財の保護・修復・維持・再生。伝統文化・芸能・工芸の保護・再生。伝統的生活文化の保護・再生。これらを踏まえた文学・哲学・思想・絵画・演劇・音楽・舞踊・工芸・建築・映画・写真・風俗など、あらゆる人間性の発露形態である、新たなる文化創造への取り組みである。

古典や伝統が存続しうるのは、いうまでもなく、そこには時代を超えた人間洞察に関する真理があるからである。古典や伝統は常にある時代状況のもとでその時代を反映した創造物であるが、それが時代を超え、また民族を超えて人間に感動を与えるのは、そこに表現された人間の深淵さと豊饒さの、状況を超えた現代性である。この現代性がなければ古典や伝統はあくまでも過去の遺産としていずれ衰退・死滅してしまう。そうなったものも多い。

問題はどのような古典や伝統を、人間の生存のために継承していくのか、という見極めと問題意識である。そして、どのような文化種をこれからも人間存続のための原像種として育てていったらいいのかということである。生物種と同じく文化種も一度衰退・消滅すれば二度と蘇生することが困難である。それは私たちが豊かに人間らしく生きていくための拠るべき人間性の原像の衰退・死滅を意味する。また、その蘇生ができたとしても継承者に断絶があればこれら種の原初的姿の回復

には相当の時間がかかる。また、その姿を回復できるかどうかも疑問のあるところである。

すべてが「近代化」していく今日の国際社会の大きな問題のひとつが、この皮相的・表層的近代化の結果として、この文化種の衰退がある。文化を支える状況がなくなってきているのである。文化に必要な対価を払おうとしないのである。文化を守り、継承しようとする人が生活できなくなっているのである。廉価なプラスチック文化でこと足れりとするように、生活文化自体がすべて、意識・美意識も含めお手軽になってきているのである。

これにともない人間自身が通俗的・皮相的にしかなりえなくなっているのである。また、大衆社会・市民社会の浅薄な知性・感情・欲望部分に迎合する形で文化状況をこれによしとする風潮が残念ながらあるのである。また、これでしか文化市場が成立しえないという閉塞状況があるのである。

なぜこのようになってしまったのであろうか。どんな貧しい暮らしをしている人々でも自己存在のアイデンティティーの拠点としての文化は大切にしている。それゆえ、決して貧しくはない。

特に日本はこれほどまでの豊かな文化遺産を持ちながらそれを伝え必要な対価を負担してでも継承・享受していこうという文化意識が衰退していつている。これにより日本社会では文化の目利きをこの二十～三十年で急速に失っている。その結果、日本文化について語るべきものを持たない、また持ちえない、国際社会では何ら魅力のない平庸な日本人が日々輩出されているのを残念ながら見るのである。自国の文化をせめて語ることができなければ国際社会においては成熟したひとりの人間として処遇することはできない。国際社会での対話を成立させ継続するための交換のカードを持っていないからである。

この四半世紀に日本人はさまざまな異文化体験を行い確かに視野も広がっていった。異質なもののへの憧れ・好奇心・探究心・学習努力とそのかわりの中でこれまで未知であったものが身近なものにもなっていった。しかし、最も身近なものは日本の文化であるはずである。しかし、この身近なものをたたみかけて聞かれたとき、おおくの人々は絶句してしまうことが多いのである。「なぜ古い仏教寺院の境内の中に神道の社があるのか。あなたがいう仏教・神道とはどのようなものなのか」こうした素朴な質問にほとんど答えられないのである。これを一例に、自分の身近な文化のあらゆる面がすべて曖昧となっているのである。

アジアやアメリカやヨーロッパについては能弁になりえても、日本についてはあまりにも曖昧なのである。とくにさまざまな国際交流活動をしている人々についてこの側面が濃厚である。これが日本人の国際化の皮肉な一面である。仕事や活動の文脈での日本は語れるが、その状況の基層となる社会・文化についてはほとんど断片的・皮相的でその認識も個人体験の域を出ていない。

さて、人間の文化の発露の形態には結果として多様な異なった表層現象を見ることができが発露の回路はどこの文化でも、そこにはかなりの部分原理的に共通性を見いだしていくことができる。そのため日本の文化の探求は、これを行えば行うほど世界の文化の探求とある時点から連動する。このことは文化の発露者である人間観の探求とも連動する。そして、逆に世界の諸文化を探求すればその文化の象徴性を日本の文化にも求めていくことができる。最初のきっかけ、入り口はどこからでもよい。こうした、螺旋状の巡遊を、日本や世界の文化についてしていかないと文化と人間の総合的な把握はできない。文化については狭隘な劣等感の裏返しのような民族主義者になってはならない。日本の文化もそもそもが土着的なものとの葛藤・融合によって成立してお

り、このことはどこの文化についてもいえる。純粋な民族固有の文化というのは文化論的には物理的にありえない。あるのは、それを固有のものと意識する、また信じたいたする民族の幻想的な想念である。文化は常に外来のものを吸収し、それを土着化させ、再生する過程で文化の生命を維持してきたのである。

さて、文化創造型カタリストというのは、基本的に伝統や古典を担っているその象徴を現代において担い、それを蘇生させ未来にも継承させ、人間の世界とは何かについての曼荼羅図の描き手であるということができる。そして、同時にその絵解きでもある。人々はその曼荼羅の世界に触れることによって、また絵解きの物語を聴くことによって、人間とは何か、人間の営みとは何か、そしてこの世の自分とはいったい何なのかを覚醒させられるのである。

C 歴史継承型カタリスト

歴史継承型カタリストとは、人間が営んできた誇るべき正の伝統的遺産とおぞましき負の歴史的遺産の両方を凝視・解説し、それらを現代の教訓と知恵、未来への教訓と知恵に転化し、それらを自己の言葉で言語化し、人々の生きていく道標として記し語れる伝承力を持った語り部のことをいうのではないのかと思う。

歴史継承型カタリストは記録をもとに語る歴史家ではない。記憶をもとに語る伝承者である。語られている物語がかならずしもすべて歴史的な事実でない場合もある。しかし、語られているものに、人々が信ずるに足りる真理があるのである。この真理を語るために物語が構成される。そして時代の流れとともに物語も再構成される。平板で凡庸な事実より感動的な説得力のある虚構がこの物語に導入されるのである。物語は伝承する人によって記憶の中に刻み込まれている。そしてこの記憶が次の伝承者の記憶の中に伝播して、そこから新たな物語として語り続けられるのである。

民族や人間の苦しみ・喜び、困難に立ち向かったときの勇気と知恵、生きていくための規範や戒め、それらのことがらが物語の主題となって語られる。こうした語り部は私たちの身近にいる。しかし、同時にこうした語り部が身近にいなくなってきているのである。伝承すべきもの、継承すべきものがあるにもかかわらず、それらを聴こうとする人々がいなくなっているからなのである。語り部は聴き手があってはじめて存続しうる。聴き手の熱意があって記憶に刻み込まれた物語がいきいきとする。その熱意がなければ記憶も朧気になり精気を失う。そして記憶は語り部の死とともに葬られていく。葬られてはならない人間の記憶があるはずである。風化させてはならない人間の記憶があるはずである。なぜならば、これらの記憶を喪失することは、私たちの生きていくひとつの道標を失うことになるからである。大事な語り部を失うことにより、人間存在の文化的生態体系が崩壊していくのである。

その意味では歴史伝承型のカタリストとは人間の道標を、過去と現在と未来を共時的に担う市井の守り役である。記憶された物語は、基本的には人間に労苦をもたらすものへの呪詛と、それを超克して人間がどのように生きていったらいいのかという祝祭によって成り立っている。

D 多文化的編成型カタリスト

多文化的編成型カタリストとは、多文化共生社会の唱導者であり、そのシステムデザイナーである。異なった民族的歴史体験やそれに基づく民族的記憶、さらには異なった伝統的文化・価値観・

生活が複合的に混住する多民族社会の中で、民族相互間の蔑視・差別・排斥・迫害などの抑圧の構造を解説しそれらを解消させ、これらが生じないような多文化主義に基づく寛容な社会システムやそれを支える価値や文化、さらには人間関係をつくっていくことが、その役割である。繊細かつ寛容で包容力のある人でないといけない。

こうした人々は次のような課題に取り組んでいる。すなわち、その国に居住する先住民族・少数民族・外国人といったマイノリティーの歴史と文化さらに社会問題などの多文化主義教育の促進と実施、これらの民族・外国人のための教育の実施、異文化理解教育・国際教育・国際理解教育の実施、エスニック・マイノリティーの人権擁護とそのための人権啓発・研修の実施、異民族間の各種文化・教育交流事業の実施、エスニック・マイノリティーのための社会協力活動、差別・抑圧のない多文化社会の基準づくりとそのシステムづくり、民族間の寛容の精神が醸成されるような思想・文化の創造……などである。

現在の国際社会の民族・部族分布状況は、『文化人類学事典』（1992年版）によれば大きく分けると次の通りである。東アジア（68民族・部族）、東南アジア（139民族・部族）、南アジア（112民族・部族）、西アジア（44民族・部族）、オセアニア（128民族・部族）、ヨーロッパ（43民族）、旧ソ連（79民族）、アフリカ（285民族・部族）、北米中米（120民族・部族）、南米（179民族・部族）となっている。

全世界に合計1197の民族・部族が約190の国に居住しているのである。また、北米・中南米、オセアニアは世界中から移民として多くの民族が居住し、その子孫がその国の国民となっているため、前記の先住民族に加えてその民族構成はより多様となっている。また、こうした移民国家として成立していない多くの国々でも外国人の移住・居住があるため、民族分布は現実には前記以上のものとなっている。要するに1197の民族・部族が全世界に多様な形で居住しているのである。

複合民族国家の最大の問題は民族問題である。この火種がこうした国家の不安定要因となっている。これが発火して血で血を洗う悲惨な紛争を巻き起こしているのは周知の通りである。異なった民族を内包しているから紛争が起きるのではなく、過去に、そして現在において民族的抑圧が様々な形で継続しているから、その長い記憶が怨嗟の念となり深く沈殿・潜在化し、具体的な事件を引き金として発火し顕著化するのである。発火した怨念を沈静化するために新たな強圧的な手段で封じ込めようとするが、それが逆の相乗効果となってこの怨念が増幅するのである。発火したものは力によっては消火できない。火に油を注ぐことになってしまう。民族問題は、複合民族国家においては、その国の命取りになりかねない深刻な問題なのである。

民族のルサンチマン（怨恨）は特に二十世紀において根深いものがある。抑圧された経験に基づく自己の、または肉親のルサンチマンが超克されることなく、深く感情と記憶に刻み込まれているからだ。だからこそ、このルサンチマンを超克し、民族間の信頼感を増幅させ、両者間の融和を図ることのできるカタリストが必要なのである。特定の民族利害だけを代表してはこれではできない。

特に近代・現代史における戦争時の虐殺・抑圧へのルサンチマン、植民地主義による収奪・強制的同化・文化の抹殺へのルサンチマン、国家形成にともなう少数民族や先住民族への抑圧へのルサンチマンなど、これらの記憶はいかなる未来志向を唱えても根源的に人々の記憶から抹消したくても抹消できないものである。未来志向は過去と真摯に向き合うことからしか道標を求めることはで

きない。負の遺産といつまでも向き合うのはしんどい。でも、そのルサンチマンは清算がない限り人々から消えないのである。

問題は、こうしたルサンチマンを教訓として転化できないところにある。過去を過去としてしか見ないところにある。現在は過去の継承によって成り立っている。であるとするならば、人々の存在も過去の継承によって成り立っているはずである。その、継承しているものの中に現実として多くのルサンチマンもあるのである。それらがある故に、国際社会の最大の不安定要因としてこの、民族問題があるのである。

自分と異なる人々に対して、どのような考え方・倫理観を持っていったらいいのかというのは、実は人類のいまだ解決を見ることのない課題である。今日なお、多くの人々がその答えを探しあぐねている問題なのである。

古くは、ユダヤ教では『出エジプト記』の中で「汝ら寄留者を虐げることなかれ。汝らは寄留者であったからである。」と少数者の立場にたつことを教えている。また孔子は『論語』の中で「己の欲せざるところを人に施す無かれ」と他者に接する道を教えている。ヒンズー教にも「Atithi Devo Bhavo」（賓客は神の形代なり）という表現で、見知らぬものを歓待することの隠喩を文化装置としている。この隠喩は日本においては折口の唱えるまればとの概念として土着の信仰に根付いている。こうした異人歓待の習俗はアメリカ大陸のネイティブアメリカンの生活にもあり、ルイス・モルガンが『アメリカ先住民のすまい』でそのことを報告している。また、ヨーロッパにもインドや日本、アメリカ大陸とおなじような異人歓待の土着的風習がキリスト教と習合してサンタクロースの説話になっている、ということを知ることがある。

異人への倫理は決して異人にたいする倫理だけではなく、人間とは時と場合によっては、つねに自分が異人となることがある。だから、異人を大切にすることを古来から教えてきたのである。

現代社会は大きく人の移動がある時代である。このことはいうまでもなくだれしもが異人となることを意味している。こうした時代に異なった人々にどのような倫理をもって処遇していったらいいのか、現代人はまだ古代の倫理を超克した、新たな哲学・思想・倫理観を獲得していないように思える。

こうしたものをつくり出し、社会システムを編み出していくのが多文化編成型カタリストの役割である。

E 異文化交流型カタリスト

異文化交流のカタリストとは、異なった文化を持った人や社会の境界上にあって、相互の対話を促進する役割りを果たしたり、またそのそれぞれの異質性に働きかけることにより、それぞれが変容したりまたその変容の過程で相互に刺激し合い、融合を行い、当初の異質性を変化させ新たな文化を創造させることができる媒介力のある人のことをいうのではないのかと思う。

こうした人々は次のような課題に取り組んでいる。国際的な文化・芸術の交流。国際的な学術の交流。国際的な研究生・留学生・研修生の交流。国際的な青少年・市民の交流。

異質なものに触れない限り人や文化は変化しない。変化する契機と動機がないからだ。その変化を作意的に行うのが異文化交流型カタリストである。変化の結果を予測して行うものもあれば、予測しないで、または予測できないで行うものもある。特に人づくりに関わる事業は十年・二十年と

いう単位で考えていかなければならないので、経験的にどのような変化が人に現れるかはある程度
の予測はつくが、その具体的成果は予測しがたい。だから楽しみだともいえる。

こうした交流は基本的にはソフト（知識・発想・着眼点・思考の枠組み・体験・価値観・技能な
どの）の習得・交換事業である。習得・交換すべきソフトが貧弱で魅力のないものであればこうし
た交流は成立しない。また一面こうした交流を行うことによってソフトの充実を図ることができる
ということもある。ソフトが外部にさらされてその真価が問われるからである。このため、国際社
会に通用するソフトが交流を積み重ねることによって開発され、製品化されることになるのである。

こうした交流により、交流する人および交流の主題とその内容が内外にさらされて、相互に刺激
し合い、痛みを経験してしなやかなものとなっていくのである。こうした国際社会における人とソ
フトの流動にともなう国際的な通過儀礼を経て、人と文化が成熟していくのである。その意味では
異文化交流型カタリストとは、人と文化の通過儀礼の司祭者であるということもいえる。

ソフトにはどこの国、民族、文化のものであろうが汎用性があるものがある。いいものはどこの
人にとってもいいのである。その、知恵・技術の交換はドライなほうがいい。あまり民族的思い入
れをしないほうが使うほうも気楽になれる。一方、あるソフトには汎用できないものもある。一部
でしかその効果がない、また、一部でしかその妥当性がないものもある。

いずれにせよ、自国の文化やいろいろなソフトが国際的にもわかりやすく入手できるようにして
おかなければならない。判断は使い手にまかせればよい。日本もそのようにして古くから海外のソ
フトを利用して今日を築いてきたのだから。

F 境界性媒介型カタリスト

境界性媒介型カタリストとは、人間の意識と存在の境界域（正常と異常、正統と異端、ハレとケ、
正気と狂気、健常と〈不具〉、規範と逸脱または退廃、聖と俗……）にあつて、その両義性を有し
ているか、またはその両義性を感知する能力を持っていることにより、両極の境界域に属すると思
われている人々、またはその世界を相互に関連づけて、その全体的生態系・構造を把握・提示し、人々
に人間の持つ無辺なる世界観を与えることのできる総合的な想像力のある人のことをいうのではない
かと思う。こうした人々はいわば日常性の常界と非日常性の異界の領域界の読解者である。また
その媒介者でもある。

私たちの認識できる事象は限られている。一般的に異常と思われること、異端と思われること、
ハレと思われること、さらには狂気・逸脱と思われること、退廃と思われること、〈不具〉と思わ
れること、そして、聖と思われることなど、非日常的なことは日常的には認識の範疇に入ってこ
ない。しかし、人間存在の原理はむしろこうした非日常的と思われる事象の中にあるともいえる。その、
領域にたったことがないから、異質な感情を持ってしまうのである。なんら異質の領域ではない。

日常性の中で発露される人間性は人間のあるひとつの側面の性格にすぎない。人間の人間たる所
以は、こうした非日常的な側面を含めた一般には認識しえないものがあるからである。

人間の人間認識力は退化の方向にあると思える。近代社会や近代思潮は日常的でないものをさま
ざまな形で削ぎ落としながら人間をわかりやすいものに仕立てていった。しかし、こうしたわかり
やすさも人間の非日常性の反乱により懐疑的とならざるを得なくなってきているのである。人間の
日常界と非日常界は、かならずしも明確な境界があつて区別されているわけではない。両方の領域

が常に重層的になっているのである。この領域を明確に区別することなどできない。問題は人間がこれらの領域を区別しようとしていることである。そのほうがわかりやすいからである。

こうした非日常界を認識できる人はこの非日常界を自己の内部に具有している人である。一般の人間もこうした領域を内在化しているのではあるが、これを意識することはなかなかない。というのも、そうしたものを意識しないような生活を余儀なくされているからである。また、こうした非日常領域に入っていこうとしないからである。さらには、こうした領域を日常性の中で削ぎ落とされているからなのである。

ところで、数年前、世田谷美術館で精神障害患者が描いた作品を中心とした展覧会を開催したことがある。「アウトサイダー展」である。これらの作品を見ると人間性の根源に迫る強烈な自己表現を見ることができる。芸術作品にありがちな様式美を明らかに超えた、鮮烈な、精神患者の烙印を押された者の魂の表現がこれらの作品にはある。人間の本来の原風景とはこのようなものかと思わせる衝撃が、彼らの作品から全身に伝わってきたことが、いまでもまばゆい記憶として残っている。アウトサイダーとされた人々が、最も人間らしいものを表現しているのだ。

また、こうした領域は時代の思潮によっても逆転する。1937年、ミュンヘンでナチの手で「退廃美術展」がナチズムの情報宣伝活動の一貫として開催された。当時ナチズムの精神に否定的な精神と表現様式を持つ美術作品を退廃芸術作品として展示したのだが、これらは自由な精神を尊ぶ多くの人々を魅了した。昨年鎌倉近代美術館で、この作品の展覧会が催された。

異端や退廃や健全さというものはマジョリティーの意識または時代の産物でしかないことをこれらのふたつの展覧会は明らかにしている。

これらはほんの一例であるが、人間の世界とは常識では計り知れない奥深さがある。この深淵な諸領域を彷徨して人間の原像というものをさまざまな形で人々に提示し、非日常的な世界を含めた人間の曼荼羅をたえず描く努力をして人間性の回復を行っているのが、境界性媒介型カタリストであるのである。

G 宗教的カタリスト

宗教的カタリストとは、一般の人間にとっては超俗的なもの、たとえば神・カミ・聖・精霊・祖霊・怨霊などがその人に憑依し、その託宣を行い、それにより、その人の言語ならびに所作をもって、人々の苦悩や不安さらに不安定な精神を癒し、人々に生の喜びと心の安寧と魂のカタルシス（精神的浄化）を与えられることのできる呪力をもった人のことをいうのではないのかと思う。こうした人々は基本的には巫の系譜にある人である。

人間の聖と俗の触媒役となるのがこうした巫の人々である。その多くは道のものである。道を歩き続けることによって、その土地土地の土俗的な信仰の象徴するものを吸収し、それらをみずからの中に融合・統合してカミや精霊との共同幻想感の中から、みずからの身体をカミの依代とするのである。それゆえ、民衆がこうした巫をカミの代理と思いこむこととなったのは自然のことである。事実、古代からカミと人の明確な区別は、折口も指摘しているように土着的宗教においてはなかったようである。今日でもその心象風景が民衆の信仰形態の中に脈々と継承されている。そのカミと人の両者の境界域も曖昧で重層的であるようである。そして、巫と民衆の默契として、巫を神の形代と見なしているのである。

カミとは基本的には人々の希求するところの感情の象徴表現である。カミを必要とし、その存在を希うところの感情がカミを成立させているのである。したがってカミの存在の実体的有無というのは次元の違う話である。世俗的なものでは癒されない感情・苦悩を人々は持っている。その浄化のための超世俗的な文化・宗教装置としてカミという形での象徴現象があり、その文化装置を機能させるものとして、あらゆる形での巫の系譜の人々の存在があるのである。そして、これらの人々は民衆が担いきれない宗教的なものを担うことになるのである。

今日の世界的宗教となったその多くの始祖は、おおむねその原初的姿は遊行の道のものであった。今日見られるような世俗的な荘厳な姿はない。みな、一所不住の乞食の姿である。日本のカミも多くの民話で見られるように、その姿は漂泊の道のものとなっている。人々はこうした乞食の姿にどのように接するのか試されているのである。人間として暖かく接したものは後に祝福され、卑賤なものとして冷笑したものは、後に呪詛されているのである。乞食は『日本霊異記』にもあるように「聖の反化」である。

宗教的カタリストもこの精神をふまえている。人々に癒しという祝祭を与える一方で、人々に奈落という呪詛を与えているのである。

H 精神的カタリスト

精神的カタリスト (spiritual catalyst) とは、その存在 (表情・姿・形) または所作 (語り・歌謡・舞踊・働きぶり・生き様など) そのものが、見る者の精神にある種の感動や感銘を与え、その人々の人間形成に根源的なところで影響を与えることとなる (または与えることができる) 発散的な魅力を持った人のことをいうのではないのかと思う。こうした人々は基本的には祝の系譜にある人である。

さて、1980年代初頭頃から多くの外国人が日本にやってきた。90年代半ばの今日、それらの人々の多くを、特に都会の盛り場で見るができる。その中には路上でロックを歌う者、楽器を演奏する者、演技を披露する者、そして、アクセサリーや絵画を売る者などがいる。これまでの人々の日常生活にはなかったハレの空間を演出している異郷の人々である。なかなかの技量を持った者もいれば、稚拙な演技者もある。売っているものといえばほとんどがまがいものである。

市民や民衆がこれらの演技・品物に少なからずの投げ銭を惜しまないのは、これらの演技・品物そのものに対してではなく、それらを媒介として浸り得られる非日常的なハレの幻想的祝祭空間への喜捨である。こうした異郷からの異人と片言の会話を交えて非日常的な一期一会のはかなさを堪能するためでもある。「あの人たちのように私も自由に放浪して生きてみたい」、そんな憧れが、自分の閉塞感と合わせて、これらの異人を何か特別な感情をもって捉え、彼らを「まろうど」と錯覚させるのである。彼らは古来からいわれてきている「浮かれびと」である。

また一方で、異郷からの「アソビ イキマセンカ」と声をかけてくる浮かれ女である遊女もいる。また、雑業に就く男の役立も、アジア諸国や南米・アフリカからやってきた。彼らもまた浮かれびとである。生き延びていくために特別な知識と技量を持たぬ者は、またはあってもそれらを活用させてもらえぬ者は、女は性を男は汗を販いでいくのである。極端な経済格差はこの構造を冷厳にも変えようとしなない。世界中で見られる光景である。彼らは一般の民衆が担いたくないものを担っている、また、担わせられているのである。多くの民衆はそれをやむをえないもの、また、当然の撰

理と考える。民衆の賤視・冷たさに耐えながら、彼らはそれでも、生き延びていかなければならぬのである。私たちと同じように。

こうした浮かれびとたちは民衆が担いきれないもの、また、担いたくないものを担っているのである。そしてそれらがなんであるのかを、自らの生を民衆の目にあえてさらすことにより、無言のうちに伝えているのである。

精神的カタリストとは、そのことを人々に覚醒させるに十分な象徴性を持った人々のことをいうのである。

Ⅰ 知的誘発型カタリスト

知的誘発型カタリスト（educational catalyst）とは、個々の人間の関心や問題意識を捉え、その人々が事象の表層から深層へと探求することを誘い、それぞれの人々がその中から、人間にとって最も重要な人間認識・社会認識・文化認識・歴史認識・文明認識とは何かを体得できるように動機付け、それをもって自己認識または自己変革を行わしめることができる誘導力を持った人のことをいうのではないのかと思う。

ところで、いつの時代からかは知らないが、日本人の、自分でものを考える好奇心・探究心が衰退しているように思えてならない。それにとって代わってきたのが、みんなで考えて答えを探るというマニュアル的な学習方法・思考方法である。機械の操作には、だれしものが解るマニュアルは確かに必要であるが、人間の営みやそれによって成り立っている社会の諸相や文化の役割さらには歴史の見方、これらをふまえて、人間をめぐるさまざまな象徴性・隠喩性の解説を行い自分の見識を持つためには、いまさらいうまでもなく、答えもなければそのためのマニュアルなぞないとまず考えるのが当然なのである。ましてや、人間の人生のマニュアルなぞどこを探してもない。

現代人は答えを持ち得ないことに対してあまりにも耐久力がなくなってきた。はやく安易な方法でしかその答えを見つけだそうとしていない。しかもだれかにその答えを出してもらいたいとしている。若いこれからの人ならともかく、それ相応の人生経験を経た人でも、この人たちのものを考える、または見る視座に感動することはほとんどない。見方もその表現方法も使用する語彙も安逸で、本当に自己が語っている主題に真剣をもって取り組んでいるとは考えにくい。（ただ、当人はそのつもりでいるはずである）竹刀で相手を傷つけないようにまた、自分も傷つかないように練習しているようにしか見えない。

致命的なのは語彙と表現力の貧弱さである。琴線にふれないのである。目から鱗が落ちることがまずないのである。響いてこないのである。その人の言葉が全身を揺さぶってこないのである。ムラ意識に明らかに呪縛されているのである。ムラでは通用しても多様な人々が集合する「都市」では通用しない。ましてや国際社会では通用しないのである。

ムラ意識でも深い伝統と伝承をふまえた問題意識なら、必ずそこには、多くの人々をひき付けるものがある。だが、こうした歴史の重みと腹の底から出てきた言葉を聞くことは稀である。言葉がなんら脳裏に刻み込まれないのである。問題意識の視座と展開方法が根底からずれているのを日々散見する。

なぜこのようになってしまったのであろうか。人間の魂と知性と感情を誘発できる唱導的な教師（狭義の教師だけでなく広義の教師）が少なくなってしまったからであらうか。状況を大きく捉え、

同時に個々の人間性の本質を幻視・透視する人間が、微温的な市民社会・皮相的大衆社会の中で育ちにくくなってきているからであろうか。

こうした社会から離脱し真剣をもって異郷の人々と真摯な対話を重ねてきた者が、新たなる知的誘発型カタリストとして人々の前に現われるのは時間の問題のような気がする。なぜならば、日本人の知性・精神さらに気力は明らかに衰退の方向にあり、対処療法的方法ではこの日本社会の閉塞状況を変革していくことはできないからであり、こうしたカタリストが求められることになるのは必然であるからである。

J 情報発信型カタリスト

情報発信型カタリストとは、人々に事象の認識に必要な情報を提供しつつ、その情報の正鵠を得た解説を行い、そこから、これからどのような方向性にそって、どのように歩んでいったらよいか、その方向性と歩み方の情報を与えることによって、現実の人間とその社会がそれにそって変容・変革が行われるような、国際的にも妥当性・普遍性があり、なおかつ説得力のある発信を行える人のことをいうのではないのかと思う。こうした人々は基本的には社会や文化・文明さらに人間形成のための知的なデザイナーであり唱導者である。

あらためていうまでもなく、日本社会や国際社会は情報化社会に入っている。情報の受信・発信の技術革新がこの数年間で急激に行われ、この技術使用・利用の大衆化が起きている。電信・電波・光ファイバーなどを利用した大量の情報の流れは、国境を越え、人を選ばず縦横無尽に人々を行き来している。これにより、これまで権威・権力の特権であった情報の独占が崩壊しているのである。これまで情報を独占してきた人々が、情報操作することにより自己に有利なように人々を誘導・操作することができなくなってきたのである。逆にいえば、だれしものがこのことをできるようにもまたなってきたのである。さまざまな情報を駆使して、さまざまな思惑をもって、さまざまな立場の人たちの、情報による国際的競合状況が現出してきたのである。それぞれの関心や問題意識に基づく情報を主軸とし、国境と民族を超えた、これまでになかった型の情報型の国際社会での共同体がつくられつつあるのである。情報の受信・発信の技術を一般の人々が日常化したため、これまでの共同体の概念が根底から変容しようとしているのである。これにともない、問題意識と情報による国際交流活動が日常化しているのである。情報自体が社会・文化・学術の変革を起こす触媒作用を持つようになってきたのである。

無論すべての情報が触媒作用を持つわけではない。人々の意識変革やそれにとまなう人々の行動に結びつく情報が触媒作用を持つのである。なんら価値判断や分析を加えない事実の生の情報が触媒作用を持つことも十分ある。また一方で生の情報に情動的提供者の解析や評価を若干加えることにより、その触媒性を強める場合もある。

問題はどのような問題意識を持って、どのような目的で、どのような変化を想定しながら情報の発信を行うかである。上滑りの単なる情報処理では、当然その情報もある特定の状況の一過性のものでしかなくなることもある。歴史に情報として記録しておくものは何か、その記録をどのように発信したらいいのか、その全人格的な透視図を持たなければ、情報化時代に踊らされる単なる情報提供の便利屋で終わるしかない。情報発信型カタリストとはこれができる人のことをいうのだと思う。

K 共同体的変革型カタリスト

共同体的変革型カタリストとは、閉塞的で非流動的なムラ社会（村落共同体や組織体、同種のグループや同質性の強い国民国家など）にあって、人々とムラに新たな息吹きを吹き込み、その閉塞性と非流動性に変化を与え、その共同体に解放感と流動性を与えることができる実効力がある人のことをいうのではないのかと思う。こうした人々は基本的にはムラ社会の中で異人となっていったものか、外部からおとずれてきた異人である。

ムラびとの心情には、よそから訪れてきたものがこれまでのムラの状況を変えてくれるのではないかとした漠然たる期待・願望が古来から連綿としてある。学外から著名人となった学長を招くのも、外国人を招いてイベントを行い国際化を推進しようとするのも、外国人に助っ人を頼むのも、また、異業種の専門家を招き新風を起すのも、これらは皆、こうした人々の異質な発想・方法・感情が、ムラのしがらみでどうしようもなくなっている人々の意識や生活を活性化させてくれるのではないか、という気持ちがあるからだ。と同時にこうしたムラの人々は、こうしたムラびとではない異人の異質な生命力を最大限に利用することによってムラを常に蘇生させてきた経験を持っており、したたかな形でそれを知っているのだ。戦国時代の日本を舞台とした黒沢明の『七人の侍』はそのことを明確に物語っている。自分たちではできないことをよそ者である異人に託し、その享受は自分たちが行うというムラの民衆のしたたかさである。

いまから十数年前、南北海道の過疎のムラを国際交流活動によってムラおこしをした人の話を聞いたことがある。そのとき、平野健一郎（東京大学教授：当時）が「ムラにカタルシスをもたらすためには、まれびとが必要なのですなえ」、と思わずしみじみと述懐したことがあった。このムラおこしを語っていた本人もムラにとってはよそ者の異人であった。また、このムラ社会に大きな触媒作用を与えたのも異人である外国人の留学生たちであった。

ムラにカタルシスを与えるのが異人であると同時に、そのムラの秩序を変え、場合によってはムラとムラびとにカタストロフィー（破滅）を与えるのもさまざまな異人たちである。異人たちにとって、ムラびとにカタルシスを与えるためには、ムラびととムラ社会にこびりついている、ムラびとには断ち切れない呪縛を断ち切らなければならないことがあるからだ。ムラびとたちがよって立つところの基層を場合によっては壊さなければならないことがあるからだ。ここにも、異人の祝祭性と呪詛性がある。

異人たちは、ムラの虚構化した因習・陋習・権威・面子・利害などときには対峙しなければならないことが日常的にある。それをムラびとはしない。やればムラのこれまでの秩序が破られ、自分とムラびととの軋轢が生じてくるからだ。それを異人にやらせるのだ。そしてその甘味な結果の部分を楽しむ、カタストロフィーによって生じたムラの負の部分は異人に肩代わりさせる。そして異人にその負の部分を持って去ってもらうのである。そしてまた、新たな異人を状況に合わせて求めていくのである。こうして、民衆は生き延びていくのである。この生態構造は世界のいたるところにあり、時代の変化と変わりなく繰り返して営まれている。

ムラの共同体を変革していくカタリストは、ムラびと以上にこの彼らのしたたかさを知っている。それを知っていて、あえてそれを行っている人々なのである。

このムラ的な共同体を変革していく営みであるが、これが現代社会ではいわゆる国際化といわれている営みである。ところで、国際化という言葉は80年代初頭からいわれ始め、これが地方に飛び

火して80年代中頃から「地方の国際化」ブームが起きたのは記憶にまだ新しいところである。

いつごろから、この国際化する言葉が使われ始めたのであろうか。1920年代初期にはこの言葉がすでに使われていたことが、ある資料からわかる。日本の被差別部落の人々が結集して22年に全国水平社を創立するが、その翌年の23年に朝鮮半島の同じような被差別者である白丁との連帯を求めて「水平運動の国際化に関する件」というのが『水平社と水平社』（1993年）にある。また、この年、被差別部落民研究の先駆者である喜田貞吉の業績を受けて、高橋貞樹が若干19歳で『被差別部落一千年史』を出版したが、この中にも資本主義社会の「国際化」という表現がみられる。

いずれにせよ、国際化する言葉は、国際的にしようという能動的意志と、国際的になっているという受動的状況認識との両方の使い方が1920年代からある。

共同体変革型カタリストは閉塞的で同質的なムラ社会の外部・内部からの変革者である。いずれの立場で行うにせよ、ムラ共同体の多くの人々が担いきれないもの、担いたくないものを担うこととなるのは、ここでも同様である。

第3節 カタリストの属性とその構造

これまで、カタリストとは現実にはどのような人々でその存在はどのようなものかを、縷々概観・考察してきた。彼らの考えている主題もその生活形態も一見すべて異なっているようにも見えるが、果たしてそうなのであろうか。これまで見てきたカタリストの基層にある、属性というものとその属性を位置付ける構造というものを見ていくと、さまざまな共通項を認めることが出来る。では、どのような共通項なのであろうか。

A 一所不住性

ひとつには、こうしたカタリストたちは、さまざま異郷の土地または異界の領域を肉体的に精神的に旅して歩いてきた、また現在でも度々続けている一所不住性がある。古代・中世における浮浪・漂泊・遊行なる形である。

一所不住性の生活をするによって、人々は、さまざまな人々およびこれら人々の営みに邂逅することができる。これらの邂逅を通じて人間の喜びや苦悩がなんであるのかを肌で知る。そして、古老や市井の民衆から、人間が生きていくために最も大切なものが何かを聞き、共感することも多いはずだ。

一所不住の生活をすることで、さまざまな世俗の呪縛からは無縁ともなれ、自由にもなれる。これにより、人々が、なぜどのような世俗性によって呪縛されているのかもわかる。こうした生き方は従う主人を持たない、無主の生きかたでもある。

一所不住の生き方は当然不安定な生き方である。生活だけでなく、精神的にも不安定さが常につきまとう。鬱屈もするであろう。まわりを見れば同じような人々がいかに多いかに気付く。その心情もわが身と照らし合わせてわかるような気もする。同じような他者への共感が生まれるはずだ。

こうした具体的な人々への共感から、私である自分とあなたという彼らの人称の初期的な混濁がカタリストの意識の中で萌芽する。私を思いながら彼らを思っているのだ。そして、人を思っているのだ。

B 異人性

ふたつには、こうしたカタリストたちは、一所不住の生活をおくることにより、自らが他の定住者からみて、異なった人ではないかと思わせる異人性がある。世俗的意味での異人である。

日本社会の特徴かどうかはわからないが、日本のムラには、その中にあまり自浄機能を持っていないように見える。お互いに「かばい合う」からだ。それゆえその作用があったとしても、その効力はあまりない。前にも見てきたように、これをよその異人に古来より担わせてきているのである。ムラのしがらみにとくに縛られることがないからだ。また必要がなくなれば他の者と交替させることが出来る互換性があるからである。

また、異人のほうが触媒力・変革力が強いという幻想的側面がある。日本に限らず世界の多くの土俗的信仰に、この異人願望とその信仰が残っている。時代が変わってもこの心性は日本ではあまり変化しないどころか、ますますさまざまな異人の需要があるように思う。

はじめから異人である人はいない。普通のムラびとと、市民から、さまざまな経験により、異人となっていく、または、そのようにならされていくのである。

C 祝祭性・呪詛性の呪性

三つには、こうしたカタリストたちは、異人性をおびているが故に、一般市民・民衆にはできない、人々の人間性を解放したり、ムラ社会を精気あるものに蘇らせたりする祝祭性がある。また、一方でこうした解放や蘇生を拒む者に対しての呪詛性も合わせ持っている。この両方の呪性をカタリストは両義的に具有しているのである。

触媒性の強い人の話を聞いていると、その話ぶりそしてその所作はある共通のパターンを踏んでいることがわかる。

まず自分の身辺雑事から話を始める。その雑事は話の本筋の布石である。ここから、主題に入る。どのような労苦が自分にあったか、または、どのような危機意識を自分が持っているのかが語られる。または、これまで接してきた人々がどのような労苦に耐えてきたのか、どのような危機意識を多くの人々が持っているかが語られる。そして、こうした労苦や危機をもたらした人ないしは社会構造を、その労苦や危機があたかも自分に憑依した形で、これらを呪詛する。そして呪詛すべき対象に、聞き手も入っているのではないかと暗示する形で、彼らの心を一時侵していく。そして、これからどうしたらいいのかまた、聞き手もどのように考え行動をしていったらいいのか、その方向性を示す。終わりは、語り手聞き手の共振した大きく波打つ波長を鎮める形で、これからともに人間同士として歩んでいこうという祝祭の言葉でしめくくる。聞き手は最後に、ほっとし、精神的浄化を与えられることになるのである。無論、眼光・表情・身ぶり手振りが言葉の内容に合わせて変化していくのである。異次空間の演出が自然となされるのである。決して意図的ではない。自然なのである。

これがある種の呪性を持った触媒作用のある人、すなわちカタリストの話ぶりとその所作である。先述の一所不住の生活体験や異人であることからくる、心からの自然の声と所作である。語っていることが自分の肉体となっていないと、このような語りはできるものではない。強いエネルギーの発散を感じる。

原始的な宗教者の姿はおおむねこのようなものだと考えられる。大伽藍と大寺院に入り定着・権

威化すると祭祀儀礼は様式化し、呪力の生命を失う。

ところで、おおかたの人の話しぶりは、報告であったり、解説であったり、個人的体験談であったりする。内容・主題によってはそれはそれでよい。ただそれらは、カタリストの語りとは明らかに次元を異にする。

D 唱導性

四つには、こうしたカタリストたちは、言語や創作物・所作をもって、人々に祝祭と呪詛を行うため、いわばその祭祀儀礼の実効力を高めるための、その言葉と語られる内容が強い唱導性を持っている。表現された言葉と内容に人々は共感するのである。

唱導的な語り口は、基本的には日本においては伝統的に不特定多数の人々を対象に道を説く勧進比丘尼や絵解きの者、辻の捨て聖、その他あまたの道の神人・聖・芸能者たちをその起源としている。

語り口が唱導的であるためには、語りの内容がまず、人々を惹き付けるものでなければならない。でなければ、人が集まらないし、聞いてくれないからだ。次に、語られている内容が聞き手の感情に訴えるものでなければならない。この話はまったく自分とは関係のない他人事であると思えば、耳を傾げることもない。この話は自分のことなのだ、という思いを起こさせなければならない。次に、話の中に、ある娯楽性と真理性が虚構をまじえて織りなされている必要がある。事実を滔々と語ることによって、真理を悟らしめるものもある。しかし、不特定多数を相手にする場合、どのような人々でも得心できるような語り口が求められる。ということはだれしもが語られている内容が想像できるようにしなければならない。ということはだれしもが知っているような逸話や事実を話の中に主題を引き出す触媒役として挿入しなければならない。このようにすれば事実と論理の整合性がなくなってくるので、整合性を保つために物語りをある程度虚構化しなければならない。主題を炙り出すための必要な虚構化である。聖典などは皆ほとんどそうである。最も伝えたいことを効果的に表現するためには無用なものを削ぎ落とし、主題を浮き上がらせるためにある程度の誇張と娯楽と教訓を虚構の形で加えていく必要があるのである。でなければ人々の心を揺さぶらない。

もっと大きな理由は、実はこうしたことをしなければ人々は聞いてはくれず、その結果、語り手への寄進や施しがなくなるからである。語り手の生きていく知恵である。道で行われる、宗教説話や芸能は皆語り手の生存を賭けての苦しみの中からつくりだされている。

今日の民間で行われているさまざまな公益的な国際・社会活動も、姿が近代化しているだけで基本的にはこの構造の中にあるものが多い。

E 幻視性

五つには、こうしたカタリストたちは、唱導性を高めるために、人々には透視できない事象の本質と事象の未来を透視する幻視性がある。この幻視性は一所不在の生活から体得した経験と異人としての生活から得た、人間とその営みを客観的かつ冷徹な目で見るとしての視座からきている。

幻視性とは、事象の本質を把握する認識力と事象の動態を予見する透視力のことである。今日ではこれらはさまざまなデータに基づき科学的に行われている。が、それでも認識しえないもの、それでも予見できないものがあるのである。それらは、データ化不可能な、日々変わる、または古来から人間の基層的な心象風景として人間が具有している人間の心性である。これらが行動やさまざま

まな営みとして具体化したときにデータとして検証することができるのではあるが、具体化する以前はデータ化できない。これについては、それぞれの個の体験やそれに基づく直感に頼るしかない。すべての現象が人間の多様な心性の結果であるならば、その心性に対する深い見識すなわち幻視する力がなければこれはできない。

このことは、どれほど多くの人間にまつわる事例を肌身をもって知っているかが鍵となる。どれほど多く、それらの事例の本質を認識しているかが鍵となる。これは、まったく個的なものである。それゆえ、どれほど肉体的にも精神的にも知的にも、所不住の生活をして人間のありさまとその営みの意味を認識しているかが、この幻視性を持つことの要点となる。

さまざまな妄執に呪縛された個的感情に基づく浅薄な人間観ではこうした幻視性は到底持ちえない。

F 逸脱・侵犯性

六つには、こうしたカタリストたちは、変革すべき秩序・状況の対抗概念の象徴として存在するため、こうした秩序・状況を形成する人の立場から見れば、その存在は当然逸脱性があり、その所作にはこれらの秩序・状況・個的心性への侵犯性がある。それゆえ、カタリストは常に変革を望まないものの排除の対象となる宿命が少なからずある。

保守的であることがかならずしも陋習的であるとは無論限らない。保守的であるということがいい場合もあまたある。先人たちが営々として築き上げた社会や文化さらには人間関係といった伝統を、無批判にではなく自覚的形で守り、その伝統を新たなる知恵や方法・技術を駆使し、創意工夫してこの伝統を時代にあったものに常に蘇生・再生させ、未来に向けて発展させていく、これが人間の営みの自然な形である。

しかし、容認できない保守性もある。解消すべき保守性もある。それらは永い歴史の中で人々が主体的につくりあげてきたものというより、豊かで自由な人間性を否定・抑圧・呪縛してきた、世俗的で一部のものの意図的な虚構である。

人間性を解放するのも幻想的な虚構であるが、同時に人間性を否定・抑圧するのもきわめて世俗的な虚構である。そして、この虚構を成立させているのが、虚構に操作された社会構造や文化、一般の人々である。

カタリストとなる以前は、こうした人々はこれらの虚構を見抜き、最初はその消極的にその虚構の世界から離脱・逸脱していったのであろうと思う。そして、後にカタリストとして戻り、この虚構性を侵犯していったようにも思える。先述した通り世俗的虚構は民衆のなんらかの支持・共感なくして成立しえない。虚構の基層に必ず民衆がいる。市民がいる。カタリストの侵犯が虚構の基層となっているこれらについて無自覚・凡庸な民衆・市民にまでおよぶのは当然の帰結である。

G 形代性

七つには、こうしたカタリストたちは、これまで幾度も見てきたように、一般の人々が担いきれないもののおよび担いたくないものを担ってきているので、これらの形代性というものがある。一般の市民・民衆から見れば、自分たちの社会の浄化装置として自らの手を染めず彼らを都合よく利用できるわけである。

古来より日本人は、みずからが担いたくない自分の災いを、人形に形代として託して移し、それを川に流して禊ぎをしてきた。また、自分たちでは担いきれない神霊の代理として形代を据えた。こうした形代を自分たち社会の浄化のための象徴的文化装置とすることで、自分たち社会の生態系を維持してきたのである。民衆社会でのこの形代の役割は一般のムラびとでない、いわゆる非常民・被差別民におよんだ。そして、現在では日本人でない異郷の人々にも及んでいるのである。

H 幻想性

八つ目には、こうしたカタリストたちは、先述の一から七までの属性があるため、彼らがいったい何者なのか、何を考えているのか、どこからものを見ているのか、一般には理解しがたい幻想性というものがある。

逆にカタリストの側からいえば「そうやすやすとわかってもらってたまるものか」という矜持の念もある。なぜならば、市民的な理解を得られた時には、自分も市民・民衆の日常性の中に取り込まれ、その一部となってしまうからだ。そして、そのことによりカタリストとして最も重要な、幻想的な祝祭性と呪詛性の両方の呪性を失ってしまうからなのである。

これまで見てきたカタリストの属性というものを抽出していくと、以上のような共通した属性を見いだすことができる。それぞれは独立しているのではなく有機的に関連しているのである。

このカタリストという原風景というもの、または始原的姿とはいったいどのようなものなのかを探求してみると、その形態はまったく異なるがその本質においてかなりの類似性を見いだすことができるのは、先述のほかびとなのである。ではなぜそうなのかを見ていくことにしたい。

第4節 カタリストと「ほかびと」

1 ほかびとを考える意味

このようにカタリストの姿というものは、さまざまな側面から考察していくと、先述したように根源的には日本では万葉の時代から乞食者（その訓みは保加比比斗・保甘比止、以下古訓にそってほかびと、とする）と称せられた漂泊の下級の神人か巫または辻芸能者の姿と重なり合うのではないのかと思うのである。無論の古代のほかびとは決して社会の変革など考えた人などではない。むしろ社会から零落し卑賤視された無告の人々である。しかし、このほかびとの姿をさまざまな資料・論考から推察し、その姿・存在が象徴するものを原理的に見つめていくと、その多くの側面で、これまで考察してきたカタリストの持つ属性と深層の部分で符号するのではないかと思われるのである。

今日いわれているカタリストとほかびとは、当然のことながらその社会性はまったく異なっているが、その触媒性においてかなりのところでその共通性を見いだすことができるのである。では、どのようなところがそうなのか。なぜそうなのか。このほかびとの姿をさまざまな文献や論考・評論から、類推・考察しながらそれらを考えてみることにしたい。

そもそもほかびととはいったいどのような人々であったのか。実は日本の民俗学や芸能史さらには古典文学などで、このほかびとについてかなり多くの論者が少なからず言及しているのであるが、いったいこの人々がどのような人々であったかを論証したものは極めて少ない。というのも、

乞食者の姿を類推することができる資料が唯一、『万葉集』巻十六に収められている「乞食者の詠」であるからである。壽詞を述べることを言壽ぐというのが、そのほぐの原義語であるほかふ（保加布）という言葉を使った例は多くの文献に見いだすことはできるのであるが、肝心の乞食者の姿を想像・幻視させるのに足る資料は前掲の詠以外にないのである。

そのことから、ほかひびとがいったいどのような人々であったかを考えるためには、この詠をどのように解釈し、この詠を詠った詠者というものをどのように想像するかにかかっているのである。また、このほかひびとが当時どのような社会状況でどのような生き方をしていたのか、その心象風景はどのようなものであったのか、さらに重要なことは、いったいこの人々が担い・担わされたものの象徴をどのように原理的に把握していったらいいのか、これらのことを探求することによって、このほかひびとの意味が明らかになってくると思うのである。

2 『万葉集』の中のほかひびと

ほかひびとの姿を想像させるわずかな痕跡が、『万葉集』に詠として収められている。まず、その痕跡を見ていくこととしたい。

乞食者詠

愛子 吾背の君 居り居りて 物に行くとは 韓国の 虎とふ神を 生取に 八頭取り持ち来 その皮を 畳に刺し 八重畳平群)の山に 四月と 五月との間に 葉獵仕ふる時に あしひきの この片山に 二つ立つ 櫟が本に 梓弓 八つ手挟み ひめ鍬 鹿待つと わが居る時 さを鹿の来立ち嘆かく 頓に われは死ぬべし 大君に われは仕へむわが角は 御笠のはやし わが耳は 御墨の掲 わが目らは 真澄の鏡 わが爪は 御弓の弓弭 わが毛らは御筆はやし わが皮は 御箱の皮に わが肉は 御鱒はやし わが肝も 御鱒はやし わが眩は御塩のはやし 老いたる奴 わが身一つに 七重花咲く 八重花咲くと 申し賞さね 申し賞さね

右の一首は鹿のために痛みを述べてつくり

おし照るや 難波の小江に 廬作り 隠居る 葦蟹 を 大君召すと 何せむに 吾を召すらめや 笛吹と 吾を召すらめや 琴弾きと 吾を召すらめや かもかくも 命受けむと 今日今日と 飛鳥に到り 立てども 置勿に到り 策かねども 都久野に到り 東の 中の門ゆ 参納り来て 命受くれば 馬にこそ絆掛くものや 牛にこそ 鼻繩はくれ あしひきの この片山の もむ楡を 五百枝 剥ぎ垂り 天光るや 日の気に干し轉るや から碓子つき おし照るや 難波の 小江の 初垂を辛くて垂り来て 陶人の 作れる瓶を 今日行き 明日取り持ち来 わが目らに 塩漆り給ひ 腊賞(きたひはや)す 腊賞(きたひはや)すも

右の歌一首は、蟹の為に痛みを述べて作れり

訓みくだしの文は吉田修作の『まれびと論研究』慶應義塾大学国文学研究編（1985年）所収の「ほかひ人の論」による。

『万葉集』に詠は周知の通り、当時仮名文字がなかったことから、原文はいわゆる万葉仮名とい

われた漢字仮名で叙わされている。したがって『万葉集』の詠の訓みかた、漢字表記は当時の上代語の解釈によって異なりが出てくる。「乞食者の詠」についても同じことがいえる。折口信夫の『口訳万葉集(下)』(1916年)、佐佐木信綱の『新訓 万葉集 下巻』(1927年)、奈良本辰三郎の『中世芸能史の研究』(1960年)、土橋寛の『万葉開眼(上)』(1978年)など、それぞれの訓みくだし表記を見ても大きな差異はないが、一部についてそれぞれ異なった訓みと漢字表記をしている。本稿ではこれについては、この『万葉集』の「乞食者」について多角的視座から研究を行った前掲書の著者である吉田の訓みくだし文を参考とすることとする。

さてこの詠の逐語現代語訳であるが、折口、土橋に見ることができるが、本稿では折口の訳を参考とした。なぜならば、現代の(に)おける、ほかのひびと論考は折口を持ってその先駆とするからである。折口は『国文学の発生(第二稿)』(1929年)の中でほかひびとを「巡遊伶人」として規定し、ほかひびとの論を展開している。折口民族学の中心的概念のまればとにつながる始源的姿としてこのほかひびとがある。折口のほかひびとについては後にさまざまな批判を含めて論考がなされているが、ほかひびとを考えると、折口をまずふまえて考察をすることが必要であるからである。では、折口はこの詠二首をどのように現代語訳したのだろうか、それを見ることとしたい。

乞食の謡うて歩く歌。二首

お懐かしい旦那様。聞いて下さい。私がかうして暮らして居る中に、或時、外へ出掛けて行かう、と思うて、行つた時に、朝鮮の國を通りかかつて、其所の虎といふ恐ろしいものをば、八匹迄生け捕りに捕つて参りました。其皮をば敷物に縫うて、あの平群の山で、四月、五月の時分に其敷物を敷いて、陣を張つて、葉狩り(くすりがり、またはきそいがり。五月の節句に、狩りの衣服を整えて山野に出て葉草を採取する行事のこと。以下括弧内は著者注)致しました時分に、近くの山陰に並んで立つて居る、櫟の樹の下で、梓の木で拵へた弓を、沢山小腋きに掻い込み、溝の著いた鎗矢を、之も亦、小腋に掻き込んで、とつかけ引つかけ出て来る奴を、どしどし、待ち伏せして、射てやらう、と思つて、時分が隠れている場合に、鹿が私の前へやつて来て、嘆いていふには、私は急に死にさうになつて参りました。どうぞお殺して下さい。そうして、私は天子様に奉り物をしたいと思ひます。私の角は、天子の御笠の飾りになります。私の耳は、天子の御使ひになる御墨壺になります。私の耀いた目は、澄み切つた鏡であります。私の爪は弓の先につく弓弭(ゆはずとは、弓の両端の弓弦をかけるところ)となります。私の毛は、御筆の飾りになります。私の皮は、御箱に張る皮になります。私の肉は、天子の御膾(細かく切つた肉。なます。)の中へ入れて、賑かしの出来ます。私の肝も亦、御膾の賑やかしであります。私の反吐は塩辛を賑やかす材料となります。嗚呼年が寄つたことです。どうぞ殺して下さい。そうすれば、此老いぼれの骨豊一つに依つて、七重にも、八重にも花が咲き、光榮が生じた、というて御賞翫下さい。

浪速入り江に小屋を拵へ、隠れて住んでいる、此葦の中の蟹を、天子様がお呼びになる、ということだ。何の為に、私をお召しになさるのだろうか。歌唄ひととして、お召しなさるのだろうか。それとも、笛吹きとして、お召しになるのだろうか。自分では、ちゃんと、そんなことは出来ないといふことは、好く訣つて居ることだ。併し、ともかくも、仰せを承つて来よう、と思うて、今日著くか今日著くか、と道を急いで、飛鳥へ来て(着いて)、其飛鳥のおきなという所へ行き、又つく野という所へ行き、それから御所の東の御門から参上して、仰せをば承ると、まあどうだ。馬ならば絆(ほだし。馬の足をつなぐ綱)

をかけるのも尤だ。牛ならば、鼻繩を著けて、引くのも尤だが、此蟹をば、嚴重にお縛りなされて、其上、近くの山陰の樅楡（もむにれ。もみの木、にれの木。古代にはモム・モムノキ）の枝をば、幾つも幾つも皮を剥いで、持つ来て、それを毎日毎日天日にお晒しなされて、それを自分の躰とともに、確に入れてつき、又其上に庭に据えた碓でつく、という風にして、つき雑せて、難波入り江の塩の雫の、初垂りの辛く垂れたのをば垂して持つて来て、それを焼き物作りが拵へた瓶に、今日行つて、明日直ぐ、急な使ひで持つて来て、其塩をば、自分の躰にお塗りなされて、そして、旨い旨いと御賞翫下さい。（『折口信夫全集 第五巻 口訳万葉集（下）』）

この折口の現代語訳の題に「乞食の謡うて歩く歌。二首」と記したが、実は、現代語訳には何も記されておらず、この題は原文の訓みくだしの文の冒頭の箇所のものである。折口は「乞食者詠 二首」を「乞食の謡うて歩く歌。二首」と訓みくだしたが、これはこの詠の性格を的確に据えた表現なので、あえて、これを口語訳に付加した次第である。

「乞食者詠」は詩歌を乞食者が詠じたものというのではなく、折口がいうように歩きながら人まえて身ぶり手振りをそえ、所作をともない演じながら謡ったものなのである。演劇性のある謡いかたをしているのである。このことから、ほかびびとが歌謡をともなった俳優の職業化した始源的形態であるといわれている所以なのである。

第5節 「乞食者」とその「詠」に関する諸論考

A 乞食者の訓みかた

まず「乞食者」の訓みかたとその表記であるが、現代では「ほかびびと」「ホカヒヒト」「ホカヒビト」「ほかいびと」「ほかいびと」など5通りの訓みかたと表記がさまざまな著書・論文でなされている。この違いは万葉の時代の訓みかたと、その後の発音の変化によるもので、いずれも間違いではない。沖浦和光はほかびびとからほかいびとの変化について次のように説明している。「古代の遊行神人はことほぎの寿を述べる〈祝言人〉であると同時に、門毎に食物を乞う〈乞食人〉であった。（寿・祝）は、平安時代まではホカイと静音で発音され、ホガイと濁音になったのはそれ以降である。」（『アジアにおける賤民芸能の位置』『部落解放』226号、1985年）

ではなぜこの「乞食者」をこのように訓みあらわすのだろうか。この点については定説となっており、奈良本の次の説明が簡潔で概括的である。「この乞食者は『万葉集古義』によって、ホカヒヒトと訓ずることになっている。このように古義が訓をつけたことは、もとよりいわれのあることであって、『倭名類聚抄』巻一の人倫部 乞兒の條に、揚氏漢語抄云 乞索兒保加比比斗 今乞索兒 即乞食兒也 和名加多井、とみえ、『日本靈異記』上の聖徳皇太子示表録第四なる片岡村の路側の乞丐人をさして訓釈に「乞丐二合カタイ又云保甘比止」と見えている。このような例証の中から、乞食者に対する訓をひきだしたのである。（中略）私は『万葉集』の二編の歌詞よりみても、この乞食者に與えられた訓はきわめて適切であり、あらためて先学に敬意を表せざるを得ない。」としている。

土橋も吉田も同様の例証をもとにホカヒヒト、ほかび人と訓んでいる。

B ほかひびととはだれか

では、このほかいびととはいったいどのような人々であったのだろうか。それは、この詠の解釈とこの時代の認識ならびにこうした乞食者の存在認識によって大きくわかれてくるのである。

(1) 折口の「巡遊伶人」説

折口はほかひびとは「壽詞を唱て室や殿のほかひなどした神事の職業化した内容が分化し、芸道化したものを持つて廻つた。最古の旅芸人、門づけ芸者であるといふ事は、語源から推しても、誤りない想像と思ふ。」として「巡遊伶人であることは確かである」としている。

そして、この謡は「其の内容から見ても身ぶりが伴うて居てこそ意義あると思はれる部分が多い。」として、このほかひびとが持つて歩いた謡は「壽詞が次第に壊れて、外の要素をとり込み、段々叙情詩化して行つて、人の目や耳を娯ませる真意義の工夫が、自然の間に変化を急にしたのでらう。」とその芸道化した姿を述べている。

ではなぜこのような巡遊伶人が発生してきたのかについては次のように述べている。「神社の有無が、神の資格定め唯一の条件になつて来ると、ほかひの対象なる精霊は、位づけが明らかに下がつて来る。そうなると、壽詞の価値も自ら低くなつて、高い意味の壽詞並びに、醇化した神の為の新しい呪言が、のりとの名を以て、其れにとつて替わる事になつたのである。すでに地位の下がりかけて居た祝言が、更に分化して一種の職業となつたほかひの徒の始まりは、どういう種類の人々であつたであらう。一時神主として、ほかひに習熟した村の若者出の人々や、後楯なる豪族に離れた村々の神人の、亡命或いは零落した者が、占い、祓へ、まじなひと共に、祝言をのべて廻つたのが、此が職業化した古い姿と思はれる。……此の旅人はわりに安心であつたであらう。異郷の神は畏れられも尊ばれもした。靈威や鈍つた在来の神の上に、澁刺たる新来の神が福か禍かの二つどりを、迫つてくる場合が多かつた。異郷から新来の客神を待つて来る神人は、呪ひの力も示した。よごとを唱えると同時に齢と穀とを荒らす疫病、稲虫を使ふ事も出来た。……ほかいびとの、異郷を経めぐつて、生計を立てていくことの出来たのも、此の点を考えに入れなければ納得がいかない。」としている。

折口は、このほかひびとの中に「村々の語り部」も含まれていたのではないかと推測しており、このほかひびとの大きな役割は、村々に物語を持ち回ることにより、この物語が村に散布され「文学的な衝動を一度もおこさなかつた人々の心の上に、新しい刺激」を生じさせたことにあると指摘している。

まさに一所不在の宗教的・文化的触媒役となつていったのである。

では、なぜ折口はほかひびとに注目したのであらうか。折口が生まれ育つた大阪・天王寺の周辺には大きな被差別部落がいまもある。こうした被差別部落の人々の伝統的生業として予祝の門付け芸能がある。折口はこれを幼いときから見ていた。賤視され同時に畏怖されたこれらの人々が、カミの形代として神事芸能を行つていたのである。ほかひびとの原風景としてこの姿がまず折口の脳裏にはあつたはずである。この原風景を心に抱き沖繩の宗教を研究した。そこで発見したのは、カミとしてのまれびとである。まれびとの概念を中心にすえ、その現世での形代役として天王寺で体験した祝の民としての被差別民のさまざまな神事門付け芸能が、ほかひの芸能と重層したのである。日本文化の古層を被差別部落の文化と沖繩の伝統的宗教信仰の中に見いだしたのである。

(2) 土橋の「辻の芸人」説

土橋は、このほかひびとは、「律令体制の破綻、平城京の造営、東大寺の造寺・造仏の賦役の加重、相次ぐ飢饉・天災などによって本貫の地を逃亡した」乞食者であり、「本貫の地で身につけた芸能をもって豪家の門の前に立ちやがて職業的芸能人となって」いった「辻の芸人」である、としている。

そして、この詠の芸能の起源は農民の作物豊饒の予祝芸能にあると見ており、もともと鹿や蟹は農作物を食い荒らす動物であり、それが農民に捉えられて服属を誓詞する服属儀礼がこの詠のもとになっていると見ている。そして、この農民社会の中で受け継がれてきた「予祝のための服属儀礼芸能が、階級社会においては、隷属者から支配者に奏上される壽祝芸能に変貌していったのである」と、この詠の源流をみている。

この詠の解釈をこうした社会状況ならびに階級社会の中から行っている。つまり、鹿の詠についていえば、これは「言葉の表面をみる限り、鹿が殺されて君のお役にたつことを、老いたる身の光栄としているのは確かである。しかし、このような言葉を額面通り受け取るのは、あまりに無神経な読み方である。（中略）この歌が何をいおうとしているかは、歌の場を考えてみればいっそう明らかであろう。これは乞食者が、市に集まった民衆を相手に歌っている歌である。乞食者は鹿の立場に立って、鹿の気持を代弁しているわけであるが、もし鹿が殺されて大君の役に立つことを光栄とする思想を歌ったものであるなら、飛鳥・藤原朝の浮浪人にほかならぬ乞食者は、民衆に向かって国家主義思想を鼓吹した明治以後の国粹主義者・御用学者のような役割を演じていることになる。冗談ではない。この歌の真意は、『万葉集』の編者も『蟹の痛みを述べて作れり』と記しているとおりで、憶良が志賀の白水郎の妻や貧窮者に代わってその悲しみを述べたように、乞食者も鹿のためにその悲しみを、共感をこめて代弁しているのである。そしてこの歌を聞いている市の民衆も、鹿の歌を他人事のように聞かなかったであろう。」としている。

蟹の詠もこの文脈で解釈しており、縄で縛られた蟹は「使役される役民」の「象徴」であり、「吾が目らに塩塗らたはひ」は「苦痛の感情のあからさまな表現」で、これは「蟹の苦痛が大君の悦楽であるという関係を突いている」としている。そして鹿の詠と同じく「食べられることを光栄とする思想ではなく、それに抗議する思想がふくまれている」のではないのか、としている。

そして、「万葉の乞食者を巡遊神人と見る見解は、カタイ・ホカヒヒトという言葉の歴史からみても認めがたい。」と折口を批判している。

(3) 奈良本の「隷属民」説

一方、奈良本はほかひびとは天皇に隷属した海部や山部の民ではないかと、次のようにのべている。「このホカヒヒトは、古い時代の宮廷の隷属民であって、天皇に対して壽詞というよりも誓詞を述べているとってよいのである。このような宮廷の隷属民を考えれば、当然に鹿に託したものが山部の民であり、蟹に託したものは海部であったのではないかと思われる。そしてこのような推定がほぼ誤りでないことは、この乞食者詠の『万葉集』中における位置がよく物語ってくれるのである。すなわちそれ、筑前國志珂の海人の歌十首、豊前國の海人の歌、豊後國の海人の歌、さらに能登國の歌三首、越中國の歌四首とのみあるがやはり同種の歌と思われるものに続いて、その位置を占めている。したがって乞食者と海人との間につながりがあっても、すこしも不思議ではないし、むしろつながりを考えなければならぬのである。」

奈良本はこうした彼らにとっては、鹿や蟹は狩猟や漁労の対象で、収穫の予祝を行ったものがこのような形で詠に変形したのではないかと述べている。

そして、この彼らの予祝の芸能をほかひの芸能に媒介したのが市であると述べている。つまり、「市は単なる交易の売買の場というよりも、まさにホカヒの場であり、なぐさめの少ない庶民の社交場でもあったのである」「その市では海部の人々によって貢せら（れ）た生魚・干魚の店もまたひらかれていたであろうが、また海部出身の壽人がそのホキコトを連ねる場所ともなっていたであろう」と。また、「古代の市はそのような点で、山部・海部の人々がホキコトをつらねるために現れて、群衆の人々から生活の資をうけるには、きわめて恰好のところであったと思われる。私は乞食者の詠の場所も、市頭であったということを確認できるのである。」と述べている。

奈良本の着目した市であるが、当時どのような人々が物乞いをする形で市に集まってきたのだろうか。市は、いくなれば多くの浮浪人が集まり、住みつくところでもある。このようなかれびととは、ムラにはいられなくなった者、ムラから逃げだした者、没落した者、社会から落伍した者、社会と関わることをやめた者、狂た者、病や体の異常を持った者、旅の者、などの人々……であったことは想像できる。さまざまな水脈でこれらのうかれびとが市に流れ込んできたはずである。なぜならば市にいけば卑賤視されてもなんらかの雑業について、生きのびていくことができるからである。この生態はむかしもいまもつきることなく変わらない。

奈良本は山部・海部のほかひびとたちの祝言ぎの職能はこうしたうかれびともおよぼされたと考えている。そしてあそびめ（遊女）の始源的形であるうかれめ（遊行女婦人・宇加禮女）にも、このほかひの芸能が伝わったと考えている。

そしてこのような動物をにえとする芸能は「やはりにえを献ずる立場にある人々、すなわち隷属民の役割となって行ったのである。」と結論付けている。

(4) 吉田の「呪詞管理者」説

この乞食者をさまざまな角度から照射し、その姿を考察したのは吉田である。吉田はほかひ人がいったいどのような人々であったのかを具体的には断定はしていないが、当時の状況や奄美諸島のユタなどを視野に入れながらさまざまな可能性を示唆している。

まず、ほかひの語源となっている「ほく」という言葉について考察を行っている。ほかふは上代語のいくつかの諸例から祝（いわう）という意味に使われている。大殿祭 祀（まつる、いのる、ほかふ）室壽 酒楽 言壽など。したがって、『和名類聚抄』でほかひびとを「壽人之義 立人屋前 称壽詞 以乞物者」としているのである。

ただ、吉田は「ほく」は祝という意味もあるが呪うという意味も同時にあるとして、次のように述べている。「ほかひ人の元の『ほく』は祝福というよい方面だけに限らなかつた。神代記下第九段一書第一に天神が天若彦が矢を射る際、『矢を取りて呪きて曰く』と『ほく』に呪の字が当ててあり、古典体系頭注によれば、『呪と祝は同音で、説文に『祭主賛詞』とあり、もと呪と祝とは通じる点を持っていた。ここでは呪詞を述べて神意をうかがう意。（中略）呪は名義抄に『ノロフ、ウタフまた祝詞也』とあるが、ホクもまたこの意に近い』という。そして、書記では呪は別に『かする』とも訓まれている。（中略）『かする』は祝福とは逆の『神に祈って人をのろう』意（時代別国語大辞典）であり、このことから、書記通釈は『ほさく、ホクともに、善きにしも悪しきにしも

通はして、何れも祈る意あり』と説いている。即ち、『ほく』は祝福と呪詛という善悪の両義性をもった語であり、したがってほかひ人も当然その『ほく』の両義性を抱え込んでいることになる。」と。

こうした、「ほく」という語源の解釈からほかひ人を吉田は「善悪両面の作用を有する呪詞を管理する者」とまず規定している。

ちなみに『大字源』の祝を見ると「はふり、いわう、いのり、のろう」などがある。また、呪の項を見ると「いのる、のろう、のろい、まじない」の意とある。壽には「ことぶく、ことほぎ、ことぶき」とある。

吉田はこの詠の内部を検証し、二首とも詠み手に人称転換があることを次のように述べている。「一首めの鹿の歌の構成は、『愛子吾背の君』のよび掛けに始まり、薬狩の際に弓矢を携えて出てくる鹿を待って隠れていると、鹿がやってきて嘆く、ここで人称が変わって鹿の立場から鹿の各部分部分の用途が示され、最後に祝福の言葉で締め括られる。二首目の蟹の歌は、難波の葦蟹を大君が召す、ここで人称が転換し、その蟹の立場で、難波から旅をして飛鳥に至り、そこで自分（蟹）の調理される様を叙べ、祝福の言葉で閉じられる。二首に共通するのは、第一に人称転換すること、第二に鹿や蟹それぞれの利用或いは調理法が示されていること、第三に祝福の言葉で終わることである。（中略）人称転換の原初的姿は、俳優や語部などに神霊或いは精霊が乗り移りトランス状態に至る過程に生じる言語現象である。それは三人称と一人称の混淆により、個が同時に共同幻想たる神でありうるという世界を現出する。即ち、右の歌に関していえば、『わが角は』などと歌うのは、実は『神である自分の角』という意を表しているのであるが、ただ右の歌の場合は、そういう神がかり状態の言語表現がすでに様式化して使用されているに過ぎない。」と。

この人称の転換と混淆の問題は、ほかひびとの心象構造を把握するためにも、重要な指摘と考える。というのも、一般論として、芸能というものはそもそもがその源というものを、周知の通り、日本のみならず世界の多くで、神やそれぞれの共同体の産土神、精霊または祖霊への祈祷やそれにとまなうさまざまな儀礼的所作、さらには、こうした超俗的なものの憑依による託宣とその所作という姿に、その初源的形態を求めることができる。その姿が後に世俗的な形で様式化され予祝・神事芸能となっていったのだが、それを担う人の言語・所作表現というものは、決して「私は」という一人称のみの表現形態はとりえない。まず「私は……」という自己発声から物語を語りかけ始めながらも、「私」を語る過程の中で、語られるべき、また伝えられるべき主題が「人というものは……」「この世というものは……」「カミは……」「天は……」という形で三人称的表現形態をとり、この言葉と所作の呪性を自己に憑依させ、そして「あなたは……」という二人称への語りかけを行うことによって物語の呪性を聴き手に降ろし、そして、この語りかけられた「あなた」である「私」に、語っている「私」が人称転換して、私で始まった「物語」を「あなたにとっての物語」へと移入し、語り手が聴き手や見るものに、カミや諸霊との幻想的な混淆状況をつくり出すことによって彼らにカタルシスを与えるのである。そして語り手も人称転換を繰り返すことによってこの三者間の異相空間を巡遊し、その物語の基層を担いきるのである。

ほかひびとが文字通り、物乞いをしながらその食を得ていたとしたならば、その食を施した人々の施しは、ほかひびとが謡い演じた祝祭のハレの空間の享受への給付ということもあるが、根本的には、ほかひびとの具有した呪性を受けることによって得られる自己の精神の再生にあったと十分考えられる。ほかひびとの異質な感情を吸収することによって閉塞的な精神状況を解放していった

のである。またムラもこうしたほかひびとを受け入れることによって、ムラのカミとムラの収穫そしてムラびとに生命の活力を得ていたのである。

ほかひびとが漂泊・流浪の道のものであることは折口が乞食者詠を「乞食の謡いて歩く歌」としたことでよくわかる。ほかひびとの呪性は歩くことにより内在化し、歩き続けることでしかこの呪性を保つことはできなかったものと思われる。歩き続けることを宿命付けられた人々であることは理解できる。なぜならば呪性を喪しなれば人々から食を得ることができなくなり、それは斃れることを意味するからである。

このほかひびとのみならず、その後のあまたの呪性を持った道の芸能者はすべてこのような運命の中で生き続け、そしてみずからを記すことなく朽ち果てていったのである。

堂本正樹はこうした芸能者について次のように触れている。「芸能者は二つの相に分かれる。一つは、定住し祭祀しその国の魂に供える神官である。二つは土地をもたず各地を流浪しその土地土地の霊力をあまた身につけていると、自他ともに信じた人々である。前者は定期的な祭礼を行い、後者は不定期的な呪術を施す。この両者によつて土地は管理され豊かなものとなると、当時の人々は信じた。(中略)日本においては自然こそ人間の巨大な五体であり、流浪の芸人たちはいわばその五体をめぐる血液だつたのである。血液の循環が正しくなければ、日本にいう国土は死亡するであろう。(中略)定住している神官もしくは巫女、その奉仕すべき社は固定化されているだけに、その霊力は衰弱する危険があつた。ゆえに流浪の芸人たちの霊力によつて間断なく新鮮な霊力を注入してもらう必要があつた。」のだと。(『カタルシスとしての芸能』『国文学 解釈と鑑賞』 流浪の系譜・日本芸能史所収、1973年)

また、笠原信夫は「幻想空間としての芸能」(前掲誌)で、ほかひびとの持つ呪性としての異質性の基層について次のように論じている。「彼らは要するに現世的には敗者であり、秩序世界からの亡命者であつた。(中略)芸能とは秩序とたたかう武器などではもちろんないが、秩序に背をむける一面を宿命的に帯びるものなのだ。(中略)折口信夫は彼らを〈巡遊伶人〉と優雅な名で呼んだが、おしなべて社会一般の日常的生活圏から離脱せしめられた人々である。彼らの存在は日常性の剥奪のうえに成立する。あえていえば芸能、及び芸能者が賤視の対象であり続けながら、なおかつ村落共同体の中で、季節ごとに信仰心をかきたてつつ受け入れられたのは、彼らが異郷から異郷へわたりあるく人々であり、それゆえに日常的生活空間ではふれえぬ異質の感情をふんだんにばらまいたにほかならない。さらに彼らの非日常性、幻視性は日常の彼方のものを透視するちからをもつようにも考えられ、芸能者が薄ぎたないホガヒビトであればあるほど、その卑賤なイメージは反転して神々に対するコレスポンドをもつようにもみえてきたのである。芸能者に対する定住民の感情は賤視を基底として、だからこそ逆に自分たちとはまったく異質の能力をもつものというふうにも畏れたのである。しかし遊行の人々の生活は実際にはみじめなものであつた。(中略)旅の芸能者たちは、風雪の中に斃れ伏すことが唯一の予想される行く末であつた。」と。

ほかひびとや道の芸能者が呪性を持つことになったのは、その巡遊性にだけ源泉があるのだけではない。人々からの賤視を浴び続けることによってその賤視を逆に侵犯するためにも呪性が必要であつたことは容易に想像できる。卑賤視、疎外されながらも人間としての矜持の念を持ち続けたいという思い、いつ斃れるかわからない不安な毎日の中で自分を救済したい、何ものかにすがってでも救済してもらいたいという思い、さらに賤視・疎外による怨み、これらが重層的に複合して人々

には持ちえない呪性を具有していったのだと思われる。「私はあなたがたのようなものとは違う」そんな相手を侵すような自己認識と主張があったはずである。

総じてユーラシア大陸の道の芸能者はこのような姿にある。先般、前田憲二監督の記録映画「恨・芸能曼陀羅」を見て映画評を書いたことがある。このほがひびとの姿をもうすこし広い視野で考えるうえで、この映画は参考になるのでその一文を挿し入ておくこととしたい。

日本における渡来文化の源流とその基層文化をテーマに数々の意欲的ドキュメンタリー映画作品をてがけてきた前田憲二監督の新作である『恨・芸能曼陀羅』の巡回上映会を日本イタリア京都館で見た。

この映画の主題は、平安末期に、日本では後の文楽の源となった傀儡と呼ばれてきた漂泊の人形廻しの芸能民の初源的な姿を日本列島・朝鮮半島・中国大陸に追い求めながら、その人々のルーツと原風景を探りながら、あわせて朝鮮半島では広大、男寺党、白丁などと呼ばれたかずかずの放浪の芸能者とともに描き、ながきにわたって一所不住の道の芸能生活をし続けてきたこれら賤視されてきたびとびとが、人間社会でどのような象徴として存在していたのか、その解説を行うとともに、彼らが人々のために何を担い、また何を担わ（さ）れてきたのか、その意味を現代人に問う、というものである。

東アジアに滔々と流れている傀儡をはじめとする漂泊芸能民の基層文化についてはこれまで芸能史・民俗学・民間信仰史の分野などで数多く断片的に著せら（れ）てきたが、このような俯瞰した現実の姿に光をあてた作品はこれがはじめてであり、貴重な記録映像である。また、被差別者の研究と解放を希っている人にとっても、こうした人々を古来から現代までの長い歴史の流れの中で、どのように原理的に認識・読解していったらいいのか、そのパラダイム（枠組み）を構築していくうえでも大きな示唆を与えてくれるものになっている。

さて、この映画製作のきっかけとなった傀儡については一〇九五年頃記された時の漢学者であり歌人である大江匡房の有名な『傀儡子記』に詳述されている。すなわち『傀儡者は住まいの定めなく、その姿は北方からの異人のようである。木の人形をまるで生きている人間のように舞う。女は朱粉で化粧し腰をふりながら妖媚をうり、一宵の逢瀬をかさねる。耕す田や採る桑などなく、王公を知らず。税を払うことなどない自由人である。夜になると百神を祭り乱舞する。……天下にこのような者は唯一であり、（彼らに）哀憐をもたない者はいない』と大江は最後に結んでいる。

傀儡の起源については外来種説、内種説などがあり今日なおその起源は謎とされている（この映画では外来種説を採っている）。その起源はともかく、この作品にえがかれている傀儡といわれた人形廻しや放浪芸能者、またはその芸能伝承者は一様に被差別者であったことが共通にいられている。ゆえに、その感情（恨）を生みの営みのバネにすえ、異質なハレの感情を彼らは常民にもたらし、彼らにカタルシス（精神的浄化）を与えたのである。が、その一方で彼らは常民の日常性に異質な感情をばらまき同時に侵犯していったのである。それゆえ、彼らはある種の呪性をもった非常民であるといえるのである。

この映画の最後は白丁の末裔である傾いた異形の道化の乱舞でしめくくっている。この作品は現代衰なわれようとしている、世俗の呪縛にとらわれない自由な無縁・無主・無告の、東アジアにおける最後の祝りの民の末裔たちへの苦渋にみちた挽歌である。

朝鮮半島の芸能民については李杜金玄の『朝鮮芸能史』（1990年）、野村伸一の『巫と芸能者のアジア』（1995年）などで詳述されている。

インドの道の芸能もダリッドカースト（抑圧されたカーストという意。ヒンズー教の中で賤民視されている人々）によって担われている。特にヒジュラ（男でも女でもない両性具有者の意。日本ではふたなり）と称される人々の姿はまさしく視言と呪詛を行う人々で、その世界はほかひびとに通低するものがある。このヒジュラについては、大谷幸三の『ヒジュラに会う—知られざるインド・半陰陽の社会』（1995年）と石川武志の『ヒジュラーインド第三の性』（1995年）で近年相次いで紹介されている。

さて、吉田の論に戻りたい。吉田は「動物供儀を背景にした内容の歌は、万葉集、記紀歌謡に他に見当たらないが、最近調査の進んでいる南島歌謡の中に見いだすことができる。奄美諸島ではユタが病人の平癒祈願の呪術行為として動物供儀を行っていたことが江戸時代の記録に載っており、その際の呪詞の一つウワフガミ（豚拝み）が沖永良部島などで採集されている。」として、その呪詞を紹介している。そして「この呪詞がユタによって唱えられることに注目したい。ユタは、（中略）神がかりして託宣を与える巫者として、今だにノロ以上に根強く南島の社会に生きている存在であると同時に、奄美の島ダテシゴ、思い松金などの共同体の呪詞の管理者としても知られている。この神がかりして個人の問題をあつかう一方で共同体の呪詞の語部でもあるというユタのあり方が、何か古代のほかひび人に共通する所があるのではないか、ユタを検討していくことで古代のほかひび人に迫れないか、そんな見通しをもって以下ユタについて考察していく。」としてユタの呪詞に「万葉集や記紀歌謡にみられる人称転換の始原的姿がここ垣間見られる」こと、ユタになる動機が「身体の異常や不幸から来る精神的悩みといった個人的なものが大半を占める」こと、ユタが「巫者でありながら（中略）邪教徒としての汚名を受け弾圧の歴史を経験してきたこと」、共同体が整備される過程の中で土着の信仰も変容し、その結果土着の神につかえてきた神人たちは「ノロのように国家体制の中に組み込まれた共同体の祭祀を取り行うか」またユタが「共同体の司祭者として象徴的に上昇していった」のに対してユタが「始源的なシャーマン性を今だに保持している」こと、などを挙げユタもほかひびとも「国家体制の整備が土着の信仰の変容を余儀なくさせることは、先の南島のノロとユタの例でも明らかである。それ以前共同体とその中の成員である個が恰もいったいであるかのように幻想されていたので、共同体が国家に抱え込まれることによって、共同体とその個の亀裂が生じて来る。即ち、個の側からいえば、個の内部にある共同体に対する幻想が多分化し、重層的になったといってよい。その結果、土着の神に仕えていた神人は、ノロのように国家体制に組み込まれた共同体の祭祀を取り行うか、さもなければ、ユタのように共同体の祭祀から離れて個人にむかっていくかの二つに分化していく。本土の古代についていえば、前者は律令体制下の土地の司祭者、或いはその代理として宮廷の大嘗祭などに古詞を奏上しに赴いた語り部などが相当し、後者に関してはほかひびとを想定しうるのではないか。」と述べて、折口がほかひびとに関しては「共同体から宗教的に疎外され、亡命した神人であるという見解を繰り返して主張している。折口独特の論証抜きの理論であるが、このようにほかひび人の原形にユタを置いてみることにより、折口の理論は蓋然性が高まる。」と折口理論の一側面を支持している。

吉田はこの他、ほかひびとの可能性としてユタやイタコが精神障害者や盲人といった人々がおり、彼らのおおく社会から疎外されていたことを指摘し、ほかひびとの中にこのような人々が流入していたのではないかと暗に示唆している。この示唆は重要である。また、当時の民衆とは無縁になっていた仏教の状況から判断して、乞食が聖の反化であるという思想も『日本霊異記』に見られるよ

うに、乞食僧達が「民衆に祝福と戒めを説いて廻るいうほかひ人と同じ役割をになった故に民衆に受け入れられた」としている。そして、「ほかひ人や乞食僧は、共同体の祭祀の来訪神がそうであったように、非日常的な行為である祝福或いは畏怖を与えることによって、日常性を侵犯し、その活性化をもたらしたが、それは来訪神と異なり、共同体よりも主にその中の個人に対してなされていった。」と神仏混濁の状況が当時あったのではないかと指摘している。

吉田はほかひびとの機能を挙げ次のように結論づけている。「先程律令体制の成立に伴ってほかひ人が顕在化したと述べたが、それ以前、村落共同体のレベルにおいても、共同体内部、或いはその成員の個における様々な異常なものを担う形代として、実態的か否かは別として、ほかひ人は存在し得た。逆にいえば、ほかひ人はそういった祓えの形代の役割を担うことによってその存在意義があったのである。だからこそ、村落共同体にとっては、異質な漂泊民であるほかひ人に日常性を侵犯され新しい秩序を与えられることが必要だったのである」。

第6節 ほかひびとの幻像と実像

万葉の時代のほかひびとがどのような人々であったかについて、いくつかの仮説を見てきた。ほかひびとがどのような人々であったかを明示した文献・資料が限定されているため、どれも仮説の域を出ない。しかし、この中でも吉田の説がかなりその要点とその輪郭をつかんでいるのではないかと思う。

資料が限定されている以上、あとはこれら資料からどのような可能性があるのか、ほかひびとなる状況を想像し、ほかひびとの心性をそれぞれの自己体験から想像するしかない。

ほかひびとを把握するもうひとつの可能性は、ほかひびとが象徴しているものを具有している現代の日本人々の中から、ほかひびとの原像を探るという方法がある。

もうひとつは、日本以外の地でほかひびとに類する人々を探しあてて、その構造を把握することにより、ほかひびとの世界を幻視するという方法である。

ほかひびとはさまざまな零落した人々の支流が集って形成された人々の総称なのだと思う。当時こじきをかたい（傍居）と呼んだ。道の傍らに居て物乞いをしたからである。物乞いだけでは生きていけないので言祝ぎの芸をし、施しを受けたとも考えられる。

このかたいという言葉はらい病者の別名の呼称でもある。らい病者は古来から天刑病として今日まで最も不条理な冷酷な差別を受けてきた人々でもある。らい病自身はきわめて感染力の薄い皮膚病である。彼らは別名物吉ともいわれてきた。生きていくための予祝の芸をして施しをうけてきたからである。

精神的に狂れた人々も市に集まってきたはずである。特に神霊・精霊の憑依しやすい下級の巫がこうした壽詞を述べながらほかひをしたとも考えられる。

ほかひびとは基本的に生産活動をしない浮かれびとである。ものをつくるかわれりに祝祭というハレの演出者であったはずである。人々に娛しんでもらうようさまざまな笑いとエロチックな演技をした俳優であったことは容易に想像できる。

浮かれびとであるということは、なんらかの事情により（没落・逃散・隠遁……）社会から落伍していったもののはずである。それぞれの土地で身に付けた芸を披露することで口を糊していたの

かもしれない。

当然宗教的理由から遊行した人々もいたと考えられる。折口や吉田が推測するように体制に組み込まれたくない、または体制からはじき出された大事な土着的宗教を携えて遊行していたのかもしれない。

どのような形であれ、壽詞に呪性があったことは間違いない。この呪力を持ちえなかったら、言祝ぎや呪詛の効果がないからである。

A ほかひびととカタリスト

ほかひびとはカタリストとはまったく異なった様相の人々ではある。しかし、彼らはともに一所不在のものであった。彼らはともに異人であった。彼らの言葉・所作にはともに祝祭性と呪詛性があった。かれらはともに唱導を行ってきた。彼らはともに幻視する認識力があった。彼らはともに、その行動において逸脱・侵犯があった。彼らはともに人々の担いきれないもの、担いたくないものの形代であった。彼らの存在はともに幻想的であった。

ほかひびととカタリストは表層的には異なった形態をとりつつ深層の属性においてはこのようにかなり共通の属性よって重層的に重なり合っていることを見て取ることができるのである。このことは、少なくとも日本においてはカタリストとはほかひびとの系譜の延長線上にある人々とも考えられるのである。無論現代のカタリストたちがそのようなことを意識しているはずもない。

このように考えていくと、カタリストというのは冒頭の「変革を行うもの」という国際的な認識だけではかならずしも十分ではないことがわかる。その、原義に戻ればもっと人間の在りようについての根源的な提起をしている言葉のようにも思える。本稿ではカタリストの原像としてほかひびとにその焦点をあてて考察してみた。このような人々は世界の多くの社会史・文化史の中にいるはずである。カタリストを真にカタリストたらしめているのはこの世と人への祝祭性と呪詛性の両方の呪性を持った触媒性である。カタリストをさまざまな文化から捉えなおして、カタリストの意味をより豊かにしていく必要があるのではないかと考える。それが人間の再生につながると思うからである。

第7節 あらためてなぜ現代社会とカタリストとなのか

なぜこれほどまでにカタリストやほかひびとにこだわったのかと聞かれれば、率直にいて答えはたったひとつしかない。それは、本来人間が持っていたはずの豊饒で自由な人間性が、なぜかはわからぬがじわじわと衰退していつている、そんなくやしさと危機感があるからである。特に日本はそうである。これほどすばらしく豊饒な人間の文化を持ちながら、それらが継承されず、器用に状況に対応できる人間だけが増え、人間としての多彩な響きを感じないのだ。人間が退屈なほどまじめになってきているのだ。単調になってきているのだ。このままいったらどうなるのだろう。そんな不安感もある。

人間が楽しくなくなっているのだ。魅力的でなくなっているのだ。何かとっても大切なものが削ぎ落されているような気がしているのだ。そして、それに気が付かないのだ。そんな思いは果たして、私だけだろうか。

そうした人間によって形づくられる社会とは、いったいどのような社会になるのだろうか。人間の原風景というものを深く認識していない社会というものは反面これらの原風景が社会に内包されない社会でもある。それは無意識の人間性の否定にもつながる社会でもある。多数がその原風景を非日常的な異界と感じるからだ。異界を異界としてしまうことは人間の世界をせばめることと同じである。それでいいのだろうか。自分で自分の首をしめて、それでいいのだろうか。人間性は無辺である。探求すればするほどその世界は広がり、そこに人間の豊かさと人間の限りない自由の可能性がある。その鍵が、ほかびびとなどの非常民である異人が巡遊してきた世界を理解することであると思うのである。

常民社会とは所詮、凡庸・閉鎖的なものなのだろう。しかし、彼らとて昔からそれを知っていた。そして、そのために非常民たる人々を確かに差別・蔑視もした。だが、自分たちにはない何かを持っている人々として彼らを畏怖もしたが歓待も大切にもしたのである。おたがいの默契により両者は内通していたのである。非常民も自分たちの文化の享受者としてこれらの常民を必要としていたのである。凡庸・閉鎖的な常民といっても、つい二十年前までは、これぐらいの文化・人間観は持っていた。しっかりとした目利きもいた。野暮・無粋なことはいわなかった。浅学だったかもしれないが人間としての温かみ、きびはあった。生きていく知恵も持っていた。これらは伝承によって受け継がれてきた。

今日私たちはいったいどのようなものを継承しているのだろうか。今日常民もいなければ非常民もいなくなってきたのだ。わずかにいたとしても、非常民も常民も息も絶え絶えとなっているのだ。それに代わってなんとも形容しがたい市民がいる。たしかに人はいい。人をあざむくようなこともほとんどしない。そこそこの正義感もある。親切でもある。でも、具有している人間の原風景はあまりにも均質なものとなってきたのだ。

彼らはどこに自分たちの存在理由を見いだしているのだろうか。語る者として何を持っているのだろうか。何を持って自分たちを日本人としているのだろうか、いくどかそれを聞いてみたほとんどが曖昧であった。それでもこれから生きていけるのならそれでいいのかもしれない。別に日本人であることに誇りを持つなどといっているのではない。たまたま日本で生まれ育ったなら、その体験からどのような人間観・文化観・歴史観さらには社会観を育んできたのかを聞こうとしたのだ。どこの国の人々でも、それらを考えながら自己形成を行ってきている。そして、国際社会で、その体験や認識や知識の交流・対話をして、またそれをもとに世界の人々とこれからの人間の在りようと、人間社会の在りようを考えようとしているのである。

人間の無辺なる自由な世界を拡大するために、さまざまな非常民または異人の世界をまだ探求している。異人は古今東西どのようにして輩出され、どのようにあつかわれ、どのような生活と文化を育んできたのだろうか。日本や朝鮮半島、インドヨーロッパなどいろいろ調べてみた。その中で、私たち人間はあまりにも重要な彼らの世界と文化を、今日失っていることを痛感した。

特に道の芸能者や宗教者から多くの考える鍵を得た。立ち止まると生命を失う、歩くことを宿命づけられた人々との生き様とその文化である。なぜならば原義的なカタリストもほかびびとも、結局人の在りようを求めて道なき道を歩き続けた道の者であると思ったからである。祝祭性と呪詛性という呪性を肉体化するためには、それしか道がなかったのだらうと思う。なぜならば、それを失うことは施しを受けられず、この先いづれ見知らぬ土地で斃れることを意味していることを知って

いた、と思うからなのである。

付記 「カタリスト論序説」について

芝崎 厚士*

本付記では、「カタリスト論序説」と著者の伊藤憲宏氏について、本論集での収録に至った経緯を含めて説明を施しておきたい。

伊藤憲宏氏は1946年生まれ。慶應義塾大学大学院法学研究科を修了後に国際交流基金で活躍された後、エイ・エフ・エス日本協会事務局長、アジア・太平洋人権情報センター企画業務部長、国際貢献塾塾頭などを歴任されたのち、国際交流共同研究所所長。中学生時代に渡米されたことで培われた卓越した英語力・コミュニケーション能力を生かして数多くの国際交流・国際文化交流活動に幅広く関与されてきたいっぽう、筆者の研究対象である日本で最初の民間の国際交流団体活動のネットワークの場であった箱根会議（1988-97）の創設と活動のイニシアチブを取られた一人であることでも知られている存在である。

筆者は箱根会議の研究を以前から継続しており（成果の一部は本論集第4号、第6号にも収録済み）、その縁から伊藤氏に取材する機会を得るようになった。一次資料が十分には現存しておらず、重要な関係者の一部が物故されていることから、伊藤氏の証言と情報提供は研究を進める上で不可欠であった。

同会議の内情を知る上で、また箱根会議に至るまでの日本における国際交流の歴史的な前提や、同時代的な関係者のものの考え方や感じ方を知る上で伊藤氏への取材からは大きな恩恵を得てきたが、その一方で、氏の独創的な国際交流論の歴史的・現代的な意義や価値についても、筆者は徐々に注目するようになった。

筆者はかつて修士論文を公刊した『近代日本と国際文化交流』（有信堂高文社、1999年）において、国際交流基金の前身である国際文化振興会を研究した際に、同時代の国際文化交流をめぐるさまざまな論者の存在を「発見」し、その独自性と現在にも通用する議論の広い射程を歴史的に評価する必要があると感じたことがあり、その一人である田中耕太郎については論文を執筆したことがあった（「田中耕太郎の国際文化論」『国際関係の思想史』（岩波書店、2015年所収））。伊藤氏の議論もまた、1990年代前半という同時代における国際交流・国際文化交流の状況を映す鏡であると同時に、現在にも示唆を与える点が多いものであることを改めて「発見」したのであった。

この「カタリスト論序説」は、当初『国際交流入門』（榎田勝利監修、アルク、1996年）に収録されたものである。同書は1995年に愛知淑徳大学で行われたオムニバス講義をもとに編集・刊行されたものであり、現在は絶版となっている。伊藤氏の議論はきわめてユニークであり、多くの関係者がこの議論の存在を知っているにもかかわらず現在は入手困難となっていることから、今回の収録にあたって、アルク側に著作権の関係について問題がないことを確認し、伊藤氏の同意をもとに、最小限の加筆と再構成を加えて収録した。

今回の収録にあたって伊藤氏に試みたインタビュー（後日紹介予定）によると、伊藤氏が本論文の執筆を思い立ったのは、愛知淑徳大学での講義後の質疑応答の際に、「伊藤さんのカタリストというのは具体的にはどのような人のことを言うのですか」という質問をきっかけに、それほど大き

* 駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部准教授

く強調したわけでも必ずしもなかった「カタリスト」概念について議論が盛り上がったことが発端であった。そこから氏は、カタリスト概念を主軸にした本論文の執筆を思い立ったという。

本論文は2部構成となっている。前半は、カタリスト論一般について、大学での議論をもとに伊藤氏自身の考え方を、あえて引用文献などはほとんど用いずに一気に呵成に書き上げている。そして後半は、カタリスト論の背景にある『万葉集』などの「ほがひびと」論を、折口信夫、奈良本辰三郎、土橋寛、吉田修作といった先攻研究をもとにして概観している。国際交流論としては、前半のカタリスト論だけでも十分オリジナリティを持つものであるが、後半の「ほがひびと」論と組み合わせることで、日本の国際交流論・国際文化交流論の歴史のなかでも他に類例を見ない議論のスタイルをとっている。

上記インタビューによると、本当はこのあとに「第三部」として、では第二部のほがひびと論と第一部のカタリスト論がどのようにつながるか、またどのようにつないでいくべきか、という議論を予定していたのとことであるが、原稿の締め切りをすでに大幅に超過しており、断念して現在に至っているという。

「カタリスト論」に関する本格的な分析は別の機会を待つとして、いくつかの読解の手がかりを読者に示しておきたい。

第1に、伊藤氏の議論は、多感な少年から青年期にアメリカで生活し、現地の中学・高校で経験したさまざまな出来事が大きな影響を与えている。その経験や見聞の一部は氏のブログ（国際交流の作法 http://d.hatena.ne.jp/nori_catalyst/）に詳しいが、突然異文化の中に身を置き、しかも太平洋戦争で戦った「旧敵国」アメリカ社会で突然暮らすことになり、いかにsurviveするかという極めて実践的な課題の中から日々鍛え上げられてきた、いわば体で覚え込んだスキルやフィロソフィーが氏の根底にあるということである。

それは、語学力やコミュニケーション力だけではない、人間としての生き方や異なる価値を持った他者とのさまざまな葛藤の乗り越え方、そして共存の仕方といった幅広い領域に及んでおり、そこが、理屈としてだけ、あるいは仕事としてだけ国際交流を語り、論じていることも多い他の論者と氏の議論の決定的な相違となっている。そして、こうした幅広さや奥深さが、その後の国際交流基金や箱根会議での活躍につながっていると考えられる。

第2に、帰国後の大学、大学院での研究の影響である。特に大学院では、松本信廣教授のもとで文学部の学生・院生に交じって『古事記』、『日本書紀』などを研究した経験があり、これが本論文の後半部分に生かされていることになる。「カタリスト」という言葉は、伊藤氏の議論にどこまで依拠しているかはともかく、現在では国際交流・国際文化交流業界ではむしろクリシェと化しているといってもよい。しかし、国際交流を異人・異界論との関係で、人間存在の根底を揺さぶる営為と関連付けて論じようとした伊藤氏の試みはきわめて独自であり、また表面的な相互理解論の域を出ないような多くの「カタリスト」を用いた議論とは大きく趣を異にする所以はここにある。

第3に、国際交流基金や箱根会議など、社会に出て広い意味・狭い意味双方での国際交流の実践に深く広く関与された経験である。田中耕太郎が国際文化振興会の創設期から戦中期に至る戦前の「国際文化事業」の立ち上げ期に議論を発表していったこととは必ずしも同列に比較はできないが、福田ドクトリン以降、国際交流基金が創設されたばかりのいわば戦後の国際文化交流の第二の出発点となった時期から箱根会議に至る20年以上の期間に、氏が第一線で見聞してきたことが、この議

論を鍛え上げさせたということになる。

以上の3つの経験や見聞がそれぞれどのようなものであり、それがどのようにしてこの議論や、後日掲載を予定しているもう一つの氏の重要な論考である「グランド・デザイン論」にどうつながっていくのかは筆者の研究課題であるが、こうした背景を前提に読み進めていただければ幸いである。

伊藤氏と直接面識のある方はよくご存じのことであると思われるが、実は第4の点として、伊藤氏自身がまさに「カタリスト」的に生きてきた方であり、「カタリスト」的な人間の魅力を強く深く持っている方でもあるという点を最後に指摘しておきたい。

伊藤氏には2009年、2015年、2016年と3度にわたって、本学部の授業やゼミに登壇していただき、学生、ゼミ生が「カタリスト論序説」を読んで分析し、伊藤氏と応答するという機会を設けた。その模様の一部は、筆者が氏の依頼で氏のブログに掲載（http://d.hatena.ne.jp/nori_catalyst/20090628/1246174174）したことがあるが、学生たちは氏の議論はもとより、氏の人間的な魅力にも圧倒され、忘れられない講義やゼミとなったという感想を多く得ている。

「カタリスト論序説」の第7章は、第二部と未完の第三部をつなぐような部分とも読めるが、そこでの氏の「人間が楽しくなくなっているのだ。魅力的でなくなっているのだ。何かとっても大切なものが削ぎ落されているような気がしているのだ。そして、それに気が付かないのだ。そんな思いは果たして、私だけだろうか。そうした人間によって形づくられる社会とは、いったいどのような社会になるのだろうか。人間の原風景というものを深く認識していない社会というものは反面これらの原風景が社会に内包されない社会でもある」という指摘は、20年の時を経た現在、さらに深刻な問題となっている可能性がある。そうした意味では伊藤氏のいうような深く強い意味でのカタリストとして生きることはますます難しくなっているのかもしれない。

しかしにもかかわらず、学生たちが感銘を受けた箇所として最も多く引用するのは上記のこの箇所なのである。現在の多文化共生やダイバーシティを標榜する国際交流や国際文化交流は、こうした問いとどこまで密接に関連しているであろうか。国際交流や国際文化交流を、単に組織上の意志決定や政策論として、あるいは表層的な相互理解や相互親善としてではなく、お互いの人間性をより高次に、より深く高め合うような深いレベルでの人間の共生と共働の試みとしてとらえ、実践していく可能性を提供している「カタリスト論序説」は、現在の身近な日常と世界の諸問題のすべてに通底している課題と変革のきっかけを考察するための手がかりを依然として提供しているのである。